
咲也-sakuya- もしも咲が男だったら...

カマボコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲也 - sakuya - もしも咲が男だったら…

【Nコード】

N5943X

【作者名】

カマボコ

【あらすじ】

もしも…『彼女』が『彼』だったら…そんなもしもの世界のお話です。

花びらとキレイな女の子（前書き）

性転換…初めて書きました。

花びらとキレイな女の子

清澄高校に入学して、早くも1ヶ月が過ぎた。
今日も俺は、いつものように木の下で本を読んでいる。
この1ヶ月の間に密かに見つけた、お気に入りの場所だ。
ここなら、静かに本が読める。

「？」

突然上から何か降ってきた。

ヒラヒラと舞いながらそれは本の上に落ちる。

花びらだ…。

それをつまんで上を見た。

枝の間から降り注ぐ木漏れ日が暖かくて、気持ちよくて…なんだが
眠たくなってきたな…。

本も目も閉じようかなと思った時、視界の隅に人影が写った。

何故か気になってその人の方を見た。

(…キレイだ…)

心の底からそう思った。

夜空のような蒼い瞳。

桜色の長い髪。

人形のように整った顔つき。

美少女と呼んで間違いない、そんな人が歩いていて。
しばらく、その子が歩いていくのを見続けた。

赤色のスカーフということは同じ1年生だろうか。

(あんなキレイな子が…世の中にはいるんだなあ…)

「咲也〜！」

突然名前を呼ばれたので驚いて振り向くと、そこには…

「京ちゃん」

俺の中学校からの友達の京ちゃんこと須賀京太郎が、俺の方に向かってきていた。

「よっ！学食行こうぜ」

唐突に何を言い出すんだ京ちゃんよ。

俺は本を見せながら言った。

「これ今日返却日だから読まないといけないんだよ」

「学食でもよめますよ？」

それはそうだがあそこは騒がしくて本に集中できないんだよなあ…。俺が渋っていると京ちゃんは掌を合わせて言った。

「…実は財布忘れてきちゃってさ、このままだと俺昼飯抜きなんだよ…」

……………最初からそう言えよノヤロウ

……………。

……。
……。

「はい満腹ランチ」

「おおっ」

550円の昼食をやや乱暴にテーブルの上に置いた。
代金は明日京ちゃんがちゃんと払うからいいが、財布を忘れるって
どういふことだよ……。

「いったただきま〜す!」

「まったく……」

さっさと本を読みきってしまおう。
そう思い座って読み始めたはいいが……

ガヤガヤ……

ガヤガヤピコピコ……

ピコピコ……

ピコピコピコピコピコピコピコピコ……

京ちゃん……うるさいよ。

食事中に携帯いじるなって教わらなかつたのかよ……。

「メールしてんのか?」

「ん、いや、ホレこれだよ」

京ちゃんの携帯が写し出したものそれは…

「麻雀？」

真ん中に王牌、それを囲むように手牌が写し出されている。
最近は携帯でも麻雀できるようになったのか…。

「京ちゃん麻雀するんだ…」

「やっと役を全部覚えたところだけどな、しかし麻雀ておもしろいな！」

多分…本心から出た言葉なんだろう、けど俺は…。

「俺は…麻雀嫌いだな…」

あんなことがあったせいで、俺はすっかり麻雀から離れてしまった。
俺のなかじゃ、麻雀はやりたくもないのにやらされる儀式、そんな認識だ。

「えっ咲也麻雀できんの？」

「できるっちゃできるけど嫌いなんだよな…だからずっとやってない…」

「ほーう」

キラリ、と京ちゃんの目が怪しく光った気がした。
なんだか嫌な予感が…。

「……う〜んでもいないよりましか…よし！」

なにやら京ちゃんがブツブツ言っている。
気持ち悪い。

「なに一人で完結してんだ？」

「ククッ」

ゆっくりと立ち上がり、京ちゃんがキラリと歯を光らせる。
京ちゃん…歯に海苔着いてるぞ。

「ついでもひとつつきあってよ。メンツが足りないんだ」

「なんの？」

「麻雀部！」

……。
……。
……。

「旧校舎の屋根裏に部室があるんだよ」

「そんなところに…」

旧校舎といえは山の上にあつてまるで工事中みたいな場所だつて聞いたことがあるが…まさか麻雀部があつたなんて。

旧校舎の中は結構寂れてて窓が風でガタガタと音をたてていた。

京ちゃんはどんどん先に進んでいってしまう、速いよチクシヨウ。いやまあ俺の歩幅が小さいのが原因なんだが…俺って何で男なのに背が低いんだろ？

「着いたぞ」

目の前にはなんの変哲もない普通の扉、京ちゃんその前で立ち止まって俺に言った。

「ようこそ、お姫様」

イラッ

誰が姫だコノヤロウ、いやたしかに背は低いし、童顔ってよく言われるし、たまーに本当にたまーに女の子と間違えられるけど？ていうかそもそも…

「いや京ちゃん俺は麻雀嫌いだって…」

「カモ連れてきたぞ〜！」

「聞けよチクシヨウ!!」

泣くぞ！いくら俺でも泣くぞ！

というかほとんど涙目で部屋に入った俺が見たのは…

「…あ…」

さっき見かけた、キレイな女の子だった。

花びらとキレイな女の子（後書き）

次はいつになるかわからないです、麻雀のシーンがムズいんで…。

兩とプリマイゼロ(前書き)

いつになるかわからいですがとか言っというてこれだよ!

牌表記は

筒子 1 ～ 9

萬子 一 ～ 九

索子 一 ～ 窮

となります、読みづらくてすみません。

雨とプライマイゼロ

「お客様…?」

キレイな人っていうのは声までキレイなんだな…。なんていうか、静かで、おしとやかな声だ。

「さっきの…」

「え、おまえ和のこと知ってるの?」

「知ってるっていうか…見かけたことがあるだけで…」

「あ、先ほど橋のところまで本を読んでいた方ですね…原村和ですどろぞよろしくお願いします」

ものすごく丁寧に自己紹介された。っていうか見られてたのか、別に悪いことした訳じゃないのにすごい恥ずかしい…。

「え、えっと…宮永咲也です…」

とりあえず見様見真似でお辞儀する俺。

「和は去年の全国中学校大会の優勝者なんだぜ」

自慢げに話す京ちゃん。でもそれって…。

「それって…すごいのか?」

原村さんには失礼かもしれないが正直あまりすごいという実感がわかない…長く麻雀から離れていたせいだろうか。

「すごいじえー!!」

突然聞こえた声に驚いて振り返ってみるとそこには…茶色い髪を活発そうな女の子が立っていた。学年を示すスカーフが赤いということとは俺達と同じ1年生なのだろう、右手には紙袋を抱えている。

女の子は俺にグイと近づいて言った。

「のどちゃんはホントすごいんだじょ！インターミドル、全中優勝ってことは最強の中学生だったわけで！」

「はあ」

「しかも御両親は検事さんと弁護士さん、男子にもモテモテだじえ」

「誰かさんとは大違いだな！」

女の子を見つめながら言う京ちゃん。…京ちゃんよ、そんなんだから彼女ができないんだと思うぞ？顔はいいんだから後はその性格を治せばモテるだろうに…もったいないなあ。

まあこの残念な友人のことは置いておこう。

「えーと、宮永咲也です。よろしくね」

さっきの原村さんのときよりは緊張せずに自己紹介できた。この子が親しみやすいからかな？

「おお！なら咲ちゃんだな、私は片岡優希よろしくだじえ」

「……ちゃん……」

俺ってそんなに女っぽいかなあ？

……。

……。

……。

インスタントの紅茶を飲みながら俺達は雀卓を囲んでいる。上家には京ちゃん、下家には優希ちゃん、そして対面には原村さんが座っている。

こうして雀卓に向かうとあの時の嫌な感じが甦る、できることなら1秒でも早く離れたいが、何となくそれができなかった。

「部長は？」

「奥で寝てます……」

「じゃ、うちらだけでやりますか」

「そうですね……」

本当にやるのかよ……。なんでこんなコトに……。

でも……家族以外と打つの……初めてだな……。

東一局、チラと優希ちゃんの捨て牌を確認してそのあと鳴いた牌も

確かめる。…捨て牌に筒子はひとつもなく、逆に鳴いた牌は筒子がほとんど、典型的混一狙い…。

俺は手牌から三筒を撰んで捨てた。次の瞬間

「ロン！混一2000点！」

案の定、優希ちゃんから和了りの声が出た。

「振り込むか？フツー、筒子集めてるの見え見えでしょこれは…」

「ハハ…」

まあ他人から見たら初心者に見えるわな、まあ2000点ですんでよかったよ、18000とかだったらあとで取り返すのが難しくなるし…。

その後も適当に振り込んだり、振り込んだ分を取り返したりしながらオーラスへ。

「よしテンパったあ！！リーチ！」

京ちゃんが勢いよく一筒を勢いよく河に捨てる。

「悪いそれロン」

「なんですとオ！？」

正直このまま和了らなくてもよかったんだが、だれかが自摸ったりしたら範囲からずれてしまいかもしれない。だったら和了られる前に和了ってしまおう。

「おまえ…三色捨ててそれってどうなん!？」

「え、あゝそうか、その手もあったな」

「……………おかげさまで私がトップですね……………」

おかげさまで俺もプライマイゼロにできた。

……………。

……………。

……………。

半荘2回目だが…正直プライマイゼロで終わらせるのがちょっと厳しい。理由は俺の目の前で次々と和了る原村さんだ。どうやら全中最強の称号は伊達じゃないらしい、こっちも点数調整に苦労する。

「ツモ」

またもや自摸られる、俺からわざと振り込んだり、誰かの捨て牌で和了るなら問題ないのだが、自摸だけはどうしようもない。問答無用でこっちの点数をもぎ取られていく。

さらに次局京ちゃんがあっさりと原村さんに振り込んだ。京ちゃん…捨て牌ちゃんと見ろよ。

だが次のオーラスでさっきの自摸られた分を取り返し、この半荘もプライマイゼロで終わることができた。

半荘3回目……………。

「しっかし咲也の麻雀はパツとしませんなー」

「点数計算はできるみたいだけどねい」

「…少なくともここまでずっと最下位の京ちゃんよりはずっとまし
だろ？」

そんなたわいのない会話の最中だった。突然遠くから聞こえてきた
音。

ゴロゴロ…

「雷！」

外を見れば、強烈な雨が窓を叩いていた。

「夕立きましたね」

折り畳み傘持ってきてといてよかった。

「うそつ傘もってきてないわ！」

いやもってきてるって…え？

声がしたのはベットからだ、備え付けなのだろうか？

そこから腕が生えてきた…ように見えた。

「うっん…」

女の人が起き上がってきた、どこかで見たような気がする…確かあ

の人は…。

「生徒会長？」

どの学校にも必ずいる生徒の代表、全校集会で何度か見かけたことがある。

「んー？あなたが今日のゲストね、竹井久よ」

「あ、宮永咲也です」

「ちなみにこの学校では生徒会長じゃなく学生偽会長よ」

そういえばそうだったな。

会長は後ろから俺の手牌を覗いてきた、この人の目… なんか品定めされてる感じがするな…。
イカンイカン、集中しないと。

俺の手牌は

六七八三四六七八式式陸漆捌

これだと最低で7700点…けどこのオーラスにそんな高い点数は
いない。

俺は次に引いてきた九萬を六萬と入れ換えた。これで和了っても1
000点ですむ。

そして次に京ちゃんが俺の和了り牌を出した。

「ロン、1000点」

これで3回目も終了…。

「今回ものどちゃんがトップか？」

「今回の宮永くんのスコアは!？」

「プラマイゼロっぽー」

後ろから息を飲む音が聞こえた。

まずい、気づかれたか？

立ち上がって俺は言った。

「会長起きてメンツも足りたし、抜けさせてもらっな」

「えっオイ」

「もつかえっちゃうのー？」

「図書館に本返さない」と

後ろで俺を見つめる会長の目を見ないように、俺は部屋を出た。

.....。

.....。

.....。

どしゃ降りの雨が上から何度も傘を叩いている。アスファルトが濡れたときのあの独特の臭いが妙に鼻に匂う。

不自然... だっただろうか。いや3連続でプラマイゼロ、明らかにおかしいよな... まあでも、これでよかったんだ。

俺と本気で麻雀を打って

楽しい人なんて

いるわけがないんだから

自然と傘を握る力が強くなった。あの時の記憶が甦りそうになり、急に目頭が熱くなった。

立ち止まり、目をこするうとした。

その時だった。

ドン！！

突然の衝撃に

持っていた傘と鞆は吹き飛んだ。

「え…？」

傘が宙を舞うのが目に入ったのと自分のではない鼓動を感じたのはほとんど同時。あまりにも急激な出来事に、体が動かなかった。

「ハア…ハア…」

聞き覚えのある、キレイな声。この声は…原村さんのものだ。ということは俺は、原村さんに…抱きつかれてるのか？

「原村…さん？」

密着した体から、非常に速い鼓動が伝わってくる。走ってきたのだろっか？原村さんの顔は赤い。

目と目が合う。じつと俺を見つめるその目は…どこか悲しそうだ。少しの沈黙のあと、原村さんは口を開いた。

「3連続プラマイゼロ…ワザとですか？」

気づかれていた…いや気づいたのは多分会長だろっ。もし原村さん気づいたていたなら、俺が部屋を出ようとしたときに引き留めただろっし。

俺は落とした傘と鞆を拾いながら、呟くように言った。

「……俺が打つといつもあんな風になるんです」

「な、なんでそんな打ち方…してるんですか…」

「家族麻雀で…勝ちすぎて嫌な気持ちになられるのが嫌で…勝たないこと覚えたんです…」

「それだけ…ですか？」

「それだけです」

自嘲気味笑いながら、俺は傘を原村さんに渡した。

「使ってください、今度返してくれればいいですから」

目の前で女の子が濡れるのは、正直見たくない。

「…もう一回…もう一局私と打ってくれませんか…！」

雨が俺をビシヨビシヨに濡らす。

原村さんの悲痛は願いがと共に。

「ごめん、俺は麻雀それほど好きじゃないんです」

多分、俺が流した涙は、雨に混じって見えなかっただろう。

再戦と嶺上開花（前書き）

驚くほど盛り上がらない。

再戦と嶺上開花

雨でビショビショに濡れて帰ってきた俺だったが、幸いなことに父さんが風呂を沸かしてくれていた。

「ふう……」

お湯の温かさが、今日の疲れを癒してくれるようだった。まだ右手に残っている、牌を摘まんだときの感覚を確かめるように何度も手を動かした。

「久しぶりだったな……」

本当に、本当に久しぶりに麻雀を打った。あんなことがあったせいで、もう二度と牌を使うなんて考えなかったから。

「でも……初めてだったな……家族以外と打つの……それに……」

あの子……原村さんの顔が思い浮かんだ。彼女が俺に言ったあの言葉が、頭のなかでグルグルと廻っている。

『もう一回……もう一局……私と打ってくれませんか……！』

「もう一回打ちたいなんて……初めて言われたな……」

嬉しかった。

ただ単純に嬉しくて、涙が出てきた。

今更ながら、酷いコトをしたんじゃないかと罪悪感が募る。

イヤ…あれでよかったんだ、俺と打って楽しいなんて、そんなことは絶対にあり得ない。もう二度と、姉ちゃんの時みたいなのにはなりたくないんだ。

……。
……。
……。

次の日、俺は図書館に来ていた。理由は本を借りるためだ。だが…。

「下巻は貸し出し中ですね」

「そうですか…」

運の悪いことに、俺が読もうと思っていた本は貸し出されていた。とても面白い本だからかなり続きが気になってるのだが…アオキはいったいどうやってタカズに勝ったんだろうか？

「何が貸し出し中だった？」

聞き覚えのある声に振り返ってみるとそこには…

「生徒会長？」

昨日麻雀部で出会った会長が立っていた、隣には眼鏡を掛けた女の人おり、二人して俺を見ている。

「学・生・議・会・長」

そういえばそうだったな。

「どれどれ」

「覗くなよ」

いきなりカウンターに置いてあるパソコンを覗きこむ会長。…いいの
のかそれ？図書委員の人驚いてるよ。

「ああ、この本持つてるよ。全集もあるしなんなら貸そっか？」

「え、いいんですか!？」

うん、学生議会議長なんだからちょっと覗き見るくらいいいよな!!

「ただし、1つ条件があるわ」

「……ハイ？」

会長のすごくいい笑顔に、すごくイヤな気配を感じた。

……。

……。

……。

「本当に今日だけでいいんですね？」

部室の前で会長に最終確認をする。会長はうむと言って扉を開いた。

「待ち人きたる」

会長に続いて部室に入る。そこでは昨日と同じように原村さんが座っていた、だが俺の姿を見た瞬間、驚いた様子で立ち上がった。

視線を合わすのがツライ。昨日頼みを断っておきながら、再びここに来るなんて、俺ってヒドイ奴だよな…。

「須賀くん、優希呼んできて」

「あ、はい」

京ちゃんが優希ちゃんを読んできてから雀卓が埋まるまで1分とかからなかった。上家には原村さん、下家には染谷先輩（部室に来るまでに自己紹介した）、そして対面には優希ちゃんが座った。

「この4人で2回打ってもらっわ、ただし東風、赤4枚ね」

「やた！」

嬉しそうな声をあげたのは優希ちゃんだ、そういえば昨日優希ちゃんと打ってわかったのだが、この子東場じゃものすごく強いんだよな…。

（本のため…2回だけ…）

……。

……。

……。

「親っ、リーチいつくじえー！」

速！まだ2順目だぞ！？
優希ちゃんの捨て牌は西と八槍の2つだけ…読めるわけがねえ…。
すっげー嫌な感じがする。

次巡、優希ちゃんが山から牌を引いた、その瞬間…

「ドーン！リーチ一発ツモドラ3、18000おやっばね！！」

啞然とするしかねえ…勝負が始まってあっという間に6000点持
つてかれた…。

優希ちゃんの手牌には赤ドラが2枚、さっきの手は赤と一発がなけ
りや3900…つまり1300だけだった筈なのに、たった2枚赤
でここまで強烈な手になる。しかも今回は昨日の半分しかない東風
戦…ちよつと気合い入れないとな。

東一局一本場。またもや優希ちゃんが和了ってしまうかと思ってい
たが、それを止めたのは原村さんだ。

「ロン、8300です」

「ええ！？今染谷先輩が捨てた牌だじえ！？」

「直撃ねらいです」

これで優希ちゃんの親番は終了、今回は東風戦だから再び優希ちゃ
んに親が回ってくることはない。
けど次の東二局、染谷先輩が捨てた牌に対して優希ちゃんの声が上
がる。

「それだ!!1000点!」

「なぬ!」

これで残りは2局…そろそろ俺も和了っておかないとプラマイゼ口にできないな…。ちょうど親番だし、赤もあるんだ、やるか。

十巡目、染谷先輩が牌を切りながら聞いてくる。

「張つとる?」

「ハイ、それです。タンピンドラドラの111600」
びんびんろく

「あたた…」

やってしまったという風に苦笑する染谷先輩、まああと6000点だからなあ。せっかくだし連荘してもう少し点を稼ごう。さすがに1000点の手に振り込めるとは限らないしな。

…なんて思ってたら…。

「ツモ」

染谷先輩にツモられた、そしてその点数は…

「門前混一自摸、中、ドラ1、3000・6000の一本付けじゃあ」

親の俺の払いは6000…これで俺の点数は24500か…プラマイゼ口にするには5000ちよつとの点数があるな…。

そして迎えたオーラス、親は原村さんだ。

俺の今の手牌は

西 西 西 1 2 2 3 3 4 6 7 9 9

門前混一テンパイで五筒か八筒ができれば和了りだが…。

「うりゃっ」

優希ちゃんが勢いよく五筒を切り飛ばす、普通ならここで和了って終了だろう。けど俺にはいらぬ。そもそも1位になったらオカがついてプラマイゼロでなくなっちまう。

「…」

原村さんが静かに赤五筒を切る。それも必要ない、たしかにそれで和了れば2位にはなれるがプラス2になってプラマイゼロじゃなくなる。

俺が目指すのはあくまでプラマイゼロだ。

だが次巡でそれは起きた。

「リーチ」

突然の原村さんからのリーチ宣言。驚いて原村さんを見た。

原村さんもまた、俺を見ていた。

まっすぐな、強い意思を込めた瞳。

間違いなく試されている。

さっきまでは5200でよかったのがこのリーチで4100から5000に下げなくてはならなくなる。そしてそれができるのは70

符2翻のみ…。

瞳を閉じ、息を吸い、静かに吐く。

「ふう…」

そしてゆっくりと目を開き、王牌を見た。

嶺上牌は…二索…！

山に手を伸ばし

牌を引き寄せる

引いたのは九筒、迷いなく六筒を切る。

次巡に引いたのは二索、今度も迷わず七筒を切る。

さらに次巡…俺が引いたのは西…！

「カン」

「………！」「………」

俺以外の全員が驚いたのがわかる。俺自身も、なぜこんなに都合よく欲しい牌が来るのかはわからない。だが、わからないままでいいんだ。

今はただ、この嶺上牌を、引き寄せるだけだ…！

タン…

部室に牌が跳ねた音が響く

「リンシャンシモ嶺上開花自摸」

それ同時に

「70符2翻は1200・2300」

俺のプライゼロは達成された。

勝利と涙(前書き)

やっとうさ入部。

勝利と涙

「咲ちゃんはまたプラマイゼロ…昨日と合わせて4連続……ありえないじえ」

パソコンを眺めていた優希ちゃんが言った。その表情は驚きを示している。

いや、優希ちゃんだけじゃない。部室にいる俺以外の全員が同じような表情で俺を見ていた。少し居心地の悪さを覚えながらも、紅茶を一口飲んだ。

「宮永くん麻雀は勝利を目指すものよ」

「え……」

会長の目が妙に輝いていた。まさか…

「次は勝ってみなさい！」

「…あ…」

頭が混乱した。唐突な言葉に思わず間抜けな声が出る。たしかに残り1戦麻雀を打たなければならぬ。けど俺は今回両方ともプラマイゼロで終わらせるつもりだった。

断ろうと思えばすぐに断れる。一言「嫌です」と言えばいいだけの話だ。

だけど

「…わ…」

俺は

「わかり…」

何故か

「わかました」

と言ってしまった。

口にした後で気づく、何を言ってるんだ俺は…？

勝ちたくないから…麻雀が好きじゃないから、今までプライマイゼロでやってきたんじゃないか。それなのに何故？何で？どうして？

頭の中がぐるぐる回っている。一人で勝手に混乱している俺を差し置いて、ドンドン話が進んでいく。

「わ、わかましたって…」

優希ちゃんが驚く。

「うちらには確実に勝てるっちゅうことか…」

染谷先輩が呆れる。

「……………」

そして何も言わないが、原村さんが静かに俺を睨んだ。

ヤバイ。今さら冗談だとは言えない。だけど勝ってしまったら…またあの時のように…。

…本当にそうか？あれは姉ちゃんだけの特別な反応なんじゃないか？麻雀で負けるのはたしかに悔しいかもしれない、だからって、負けたからって泣くのは、姉ちゃんだけなんじゃないか？

少しずつ、頭が落ち着いていく。そうだ、勝ったっていいじゃないか。

……。

……。

……。

二回戦も優希ちゃんの親で始まった。そして俺の配牌は

1 2 2 2 3 五 六 七 七 九 漆 漆 漆

すでにテンパイの状態だ…我ながらこの意味不明な強運には驚きを通り越して呆れる。だが今回はこの運に素直に感謝する。最初に引いた牌は北、それを切り落として横に向ける。

「リーチ」

「ダブルー！？」

「はい？」

他のみんなが俺に驚くのももう馴れた。そして次巡、引いてきた八筒を手元に引き寄せ宣言した。

「ダブリー一発ツモ、2000・3900」

「そそそそーゆーのうちのお株なんですけど!」

「積み込みか…ッ!？」

染谷先輩の指摘に首を精一杯振って否定する。

さて東二局、俺の親番だ。この親で一気に稼いでしまおう、そして後はその場の流れに任せるとしよう…だが、そんな俺考えを打ち砕くかのように原村さんから声が上がった。

「ロン、7700です」

振り込んだのは…俺だった。

東三局

「ツモ、4000オールです」

さらに一本場…

「とおらばリーチ!!」

優希ちゃんが切った四筒とリーチ棒、だがそれは…。

「とおしません……………11600の一本場は11900!」

あっさりと、原村さんに飲み込まれた…。

けど次局、逆に優希ちゃんが原村さんから7000を直取り、勝負はオーラスに…。

26400点差…跳満はダメ、満貫もダメ。八方塞がりか…。
けどなんでだろうか？

不思議と鼓動が早くなるのを感じる。

おかしいな…俺…麻雀嫌いなはずなのに…。

目を閉じる

静かに、けれどしつかりと息を吸う

「…スウ…」

俺は…どうしたい？

この麻雀を、どうしたいんだ？

いつもみたいに…プライマイゼロで終わらせたいのか？

違うだろ！

何が勝ったっていいじゃないかだよ！勝ちたいんじゃないか！

本当にか？

当たり前だろ！じゃなきゃこんなにドキドキするはずないじゃないか！

でもこんな点差、覆せるのか？

できるさ！『勝ちたい』気持ちがあるなら、勝てる！

さあ！目を開いて！勝ちにいくんだ！！

「…フウ…」

ゆっくりと目を開く。

見える、嶺上牌は…八索！！

引き寄せていく、山から自分の欲しい牌を勝つための牌を。

それは形作られていく。

それは花。

大きく咲く、勝利という名の大輪。

種は若葉となり、地より芽吹き。

若葉は育ち、その姿を茎へと変えていく。

茎の先端は蕾を生む。

俺は手を伸ばす、蕾を花に変えるための最後のピースを手にするために。

引くのは前局と同じ、西。

四つ並ぶそれを倒し、宣言する！

「カン」

「ま、また西カン!?」

手を伸ばす、勝つために、花を咲かすために。
そして掴む、最後の一片を

「ツモ…四暗刻!」

鼓動がこれ以上ないってくらい早まっている。自然と息が荒くなり、指先が震える。

「ど、どした?」

「あ…いえ、役満和了ったの…ひさしぶりだったもんですから…」

「そ、そうか…」

「宮永くん」

会長の声に振り向く、そこには心底うれしそうな笑顔があった。

「あなたの勝ちよ、おめでとう」

「かつ…た…」

思考が止まった。けれどそれは一瞬、すぐに自分が勝ったという事実と結果を受け入れ、俺に喜びをもたらしてくれた。

嬉しさと感動で頬が緩む。

勝った…勝てたんだ！

ガタン

突然響いた音に、またもや思考が止まる。音を出したのは…原村さんだった。

俯いていて表情は読めない、スカートを握りしめ、こころなしか震えている…？

「…………ツ！…………」

そのまま原村さんは、部室を駆け出していった。

強烈な既視感。

麻雀、勝った、少女、泣かせた、会えない……

さまざまな言葉が脳内を駆け巡った。

駄目だ。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ。

このまま彼女を放っておいたら、このままなにもしなかったら！

俺はまた、あの時と同じようなことを…！

「和が気になる？」

「……………」

俺の心を見透かしたように会長が言った。

「行ってらっしゃい、男が女の子泣かせたまま放っておくなんてするもんじゃないわよ？」

その言葉に背中を押された気分になり。

「…ッありがとうございます…！」

俺は走り出した。

……………。

……………。

……………。

夕日が沈んでいくなか、彼女はベンチに座っていた。やはりその顔は俯いている。

「原村さん…！」

俺の声に反応し顔を上げる原村さん。俺は彼女の隣に座った。

ほんの少しの間を置いて俺は話しかけた。

「…俺にとって麻雀は勝手も相手に嫌な顔をさせるだけのやりたくもない儀式にすぎませんでした。…けれど今日は原村さんと打って楽しかった」

「…なんだって勝てば嬉しいものですよ…」

その言葉は、とても自嘲気味だった。

「ちがうよ、相手が原村さんだったからだよ！家族が相手の時と違った感じで難しかったし…それに楽しかった！」

あの時のドキドキはけっして嘘じゃない、俺が麻雀を一番楽しんでた時のと全くおなじものだった。

「……………私は…悔しいです」

ゆっくりと立ち上がって、俺を見る原村さん。キレイな目だ、けれど今は悲愴感満ちている。

「私は麻雀が好きです。だからあなたに負けたのがとても悔しい…麻雀を好きでもないあなたに…」

『俺は麻雀、それほど好きじゃないんです』

あの時言った言葉が、響いた。

「それに…手強い相手はたくさんいますよ…全国に」

……………。

……………。

.....。

二人で暮らすには広すぎる家。自然と使わなくなった部屋は、使わなくなった物をしまふ物置と化していた。覆っている布を取り去り、スイッチを押す。数年間使っていないくても、この雀卓はまだ生きていた。

『私は負けたのがとても悔しい……』

『麻雀を好きでもないあなたに……』

原村さんの言葉がずっと頭から離れない。麻雀が嫌いな俺に負けたのが悔しい……じゃあ俺は……どうすれば……。

「珍しいな咲也が雀卓触ってるなんて」

「父さん」

この家もう一人の住人、父さんは煙草を吸いながら言った。

「売っちゃうかそれ。家族で打つことももーないだろ……」

「……いやまだ取っところよ、かーさん達戻ってくることもきつとあるって」

「どーだかな……」

背を向けて歩き出す父さん、俺ももう寝よう。昨日今日と色々あって疲れた……。

布を被せようとしたその時だった。

雀卓の上に放り投げられた本、これは…麻雀の雑誌？

「57ページ」

「え？」

振り向いたときにはもう父さんは廊下を曲がっていた。
言われたページを開くとそこには…

一人の少女の写真。ひさしぶりに見る満面の笑み。その人の名前は
宮永照…俺の…

「姉ちゃん」

……。
……。
……。

深呼吸を一つ。
落ち着け、何を緊張してんだ。この扉を開いてたった一言言うだけ
でいいんじゃないか。

俺は今麻雀部の部室の前にいる。理由はたった一つ、入部するため
だ。しかしいざ本番となると妙に緊張する…。

もう一度深呼吸。

……よし行くぞ！

ドアノブに手をかけ開く。

少しの軋みと共にあっさりと扉は開いた。

そのとたん十の瞳が俺を見た。

会長…いや部長を見据え、はっきりと言う。

「麻雀部（こ）に入れてもらえませんか」

「俺…原村さんともっとたくさんうちたいんです。もっと麻雀を好きになりたいんです…!!」

夢と手加減（前書き）

入試の結果が来るのが怖い今日この頃。

夢と手加減

「原村さん！」

名を呼ばれ、少女は振り返った。

桜色の髪、青の瞳、形のよい眉につんと高い鼻、それらがすべて完璧な位置にある人形のような顔。そして同年代の女性と比べて大きく発達した胸。

初めて原村和を見る人は必ず見とれるだろう。

和が振り返った先には二人の男女が立っていた。片方は眼鏡をかけた女性、もう片方はキャップを被った男性でカメラを抱えていた。女性が名刺を差し出しながら言った。

「『ウィークリー麻雀TODAY』の西田です、取材いいかしら」

「……………お久しぶりです」

肯定の意味も込めて和は答えた。そういえばこの人の取材を受けたことがあったな…。

カメラマンが和を撮り始めた。

「去年の原村さんの記事評判良くてね、全国中学生大会個人戦優勝！そのうえ美少女」

カメラマンが小さく「しかも巨乳…」と言ったのは和には聞こえなかった、西田がすかさず肘打ちを当てていたからだ。

「そうそう2週間後に行われる県予選だけどだれか注目している選

手はいる？」

その言葉を聞いた瞬間、和は電流でも走ったかのような感覚を受けた。そして脳裏にある人物が浮かび上がる。

ちょうど一週間前自分の所属している麻雀部に入部してきた一人の少年。圧倒的な力を持ち、異常な和了りを連発する理解不能の存在。そして、それだけの力がありながら、手加減などという信じられない行為を行う人。

和にはそれが許せなかった、まるで自分の麻雀を侮辱されているように……。そして認めたくなかった、そんな人が自分より強いという事実を。

和はいつの間にか拳を強く握っていた。

「いませんね…強豪校とか選手とか詳しくないですし…自分のスタイルを守っていれば誰が相手なんて関係ありませんっ！」

「失礼します」と丁寧にお辞儀して去っていく和を見送りながら、カメラマンが口を開いた。

「収穫なしですね…」

「いや…今回の大会は荒れるかもしれないわね」

「えっ」

眼鏡を拭きながら西田は言った、期待と興奮をかんじながら。

「さっき彼女は言いよんだ。あの天才・原村和が意識する選手がいる…しかもそれを認めたくないんだわ」

眼鏡をかけ直し、西田は空を見た。青一色の空の下、想像する。

「一体…どんな選手なのかしら…」

最重要取材対象が意識する、まだ見ぬ強者を。

だがだれが想像できるだろうか？その強者が

「すう……すう………」

木陰で寝息を立てているなどということとは…。

|||||

透き通るくらいに青い空の下、丘の上で姉ちゃんが言った言葉を繰り返した。

『リンシャンカイホー？』

『麻雀の役の名前だよ「山の上で花が咲く」って意味なんだ』

『咲く…』

その一文字には覚えがある。

だって自分の名前に入っているのだから。

そんなたわいもないことが嬉しくてついつい笑みがこぼれる。

『おんなじだ！おれの名前とー！』

そんな俺に姉ちゃんは優しく微笑んでくれて…

『そうだね、咲也』

そのまま遠くに見える山を見つめていた。

『…森林限界を超えた高い山の上、そこに花が咲くこともある』

つられて俺も姉ちゃんと同じように山を見る…しかし何故か、ひどく、眠たく…なってる…。

『咲也、おまえもその花のように 強く』

いしきが、うすれて…いく

ああ…

ねむいたいな

|| || || || || || || ||

「んあ…」

眩しい…今のは…夢？

目の前でパタパタと蝶が舞っている。

…そうだ…たしか本を読んでたら眠くなって…。
少しずつ覚醒していく意識。俺はすぐそばに置いていた本…『ウィ
ークリー麻雀TODAY』を手に取り開いた。読むのはいつもの
同じページ、この1週間この部分以外は読んだことがない。
57ページ…ある一人の高校生をあげた記事。

宮永照…俺の姉ちゃんだ。

写真の中にはもう見れないと半ば諦めていた笑顔で写る姉ちゃんが
いた。そして記事を組まれた理由、それは『全国高校生麻雀大会二
連覇』。

相変わらず勝ってるんだな…。

嬉しさと寂しさの混じった複雑な感情。それが胸に沸き上がった。

「咲也」

名を呼ばれて振り返るとそこには京ちゃんがいた。
金髪、背が高い、イケメンとモテる要素はあるのにそれを生かせな
いちょっと残念な俺の親友だ。

「やっぱりここにいたか部活いこつぜ」

「そうだないこつか」

立ち上がり、俺は京ちゃんと肩を並べて歩きだした。部室のある旧
校舎を目指して。

「麻雀部ぶかつに入って1週間だけ…もう慣れたか？」

「うーん…」

そう、俺は1週間前に麻雀部に入部した。入部を決意するまでほんのちよつと紆余曲折あつたけど…

「うん楽しいよ！家族以外の人とも打てるし、麻雀もちよつとずつ好きななつてきた！」

今までの俺の生活といえば学校に行つて授業を受けて、そのまま家に帰つて家事と読書をするくらいのもんだったが、部活を始めて以前よりも充実感が感じられるようになったのは確かだ。それはつまり楽しいつてことなんだろう。

「……ただ……」

「ん？」

そんな毎日なのだが、1つだけ悩みがあつた…それは何かというと

…

「俺つて…原村さんに嫌われてるのかな…」

「和に？」

「うん…」

原村和…俺よりも先に麻雀部に入部していた女の子でスゴい美少女。まるで人形のような…つていう例えがあるけど、本当にそれくらい

キレイな女の子だ。

俺の悩みとはその原村さんから妙に距離を置かれているということだった。

「麻雀部に入ってからほとんど会話してないし…なんか俺だけ嫌われてる気がするんだよな…」

清澄の麻雀部は部員が6人で男女比が2：4だ。原村さんは同じ女性部員とはもちろん、異性の京ちゃんとも普通に接しているのに…何故か俺とはあまり話してくれない。

男として、女の子には嫌われたくないのだ。

「はっは〜ん…おまえもしかして和のことを…」

「どうした京ちゃん？」

「いやいやべつにつに〜」

何を想像しているのかニヤニヤ笑う京ちゃん、気持ち悪いぞ。まったく…俺が言えた義理じゃないがそんなんだから彼女の一人もできないんだぞ？

「まあそれはともかく和かー、元中学生チャンプとしては複雑なんだろ。同学年以下では日本で最強だったわけだし雑誌にもバンバン載って『天才』とか書かれてるやつがさ…」

そこで京ちゃんはいったん言葉を区切り、俺を指差した。

「ポツと出のおまえに勝つことより難しいプラマイゼロってやつを目の前でアッサリやられっちまって、正直くやしいんじゃないのか

な

…俺は麻雀部に入部する直前に5回麻雀を打った。その内の4回を
プライゼロで終わらせた…。勝ちたくないから覚えた技が原村さ
んにとっては許せなかったみたいで、そう考えるといまさらだが罪
悪感が…。

「ま、咲也の家の事情は知ってるから俺はとやかく言わねーけど、
麻雀を好きになるって決めただしプライゼロで打つ必要もない
んじゃないの？」

俺の肩を組んで言う京ちゃん。

「う…うん。それは…そうなんだけどさ…」

「その二人とまれ！！」

「え？」

「ん？」

振り向けばいたが人はおらず…いやいた。塀の上で座りながら俺達
を見下ろす少女、麻雀部の片岡優希ちゃんだ。

「とっつ」

軽く自分の身長を超える塀から飛び降りる優希ちゃん、足痛くない
のかな？

「なぜそんな所でタコスを食っている？」

「タコスが切れると私は人の姿をたもてないのだ…」

「何になる気だ」

「私自身がタコスになる!!」

特徴、元氣一杯でタコスが大好きだ。

ちなみにタコスとはクレープのような皮に肉や野菜を挟むメキシコ料理だ。

|||||

今ではもう見慣れた部室の風景。中央に雀卓があつて、ホワイトボードがあつて、ベッドがあつて、湯沸し器があつて、パソコンがあつて…。

そんな部室の中央、雀卓に原村さんは座っていた。

「いよーうのどちゃんだけか？」

「部長とまこ先輩は遅れるそうです」

そう言つて優希ちゃん、京ちゃんと視線を動かす原村さんだったが、俺を見た途端に表情が固くなった。

「お茶入れるの手伝いな!」

「はいはい」

二人は湯沸し器の前に行つてしまふ。そうだ、ちょうどいい機会だ

し俺から原村さんに話しかけてみよう。

「な、何してたんですか原村さん？」

「これは…全ての山を開いて四人分を一人で打っていたんです」

なるほど、たしかに卓上の牌は全部絵を上になっている。

「たとえ全ての牌がわかっていたとしても、ほぼ毎回プラスマイナスゼロで終わらせるなんてそう簡単にできることはありません」

そう言いながら俺を見る原村さん、その顔は…とても怒っているように見えた。

緊迫した居心地の悪い空気が漂う。

その場から俺を救ってくれたのは

「お茶入ったじえー」

「さ、始めようぜ」

京ちゃんと優希ちゃんだった。

東一局 親は原村さん ドラは四筒

「リーチ！」

最初に動きを見せたのは原村さん。八巡目に二索を切ってリーチを

しかけてきた。それにしても今日の原村さんはいつもより気合が入ってるな…。

優希ちゃんが少し悩み繰り出したのは…九萬。だが…

「ロン、18000」

「じえ〜〜〜〜！」

「なむ…」

口から魂を出しながらふらつく優希ちゃん、ホントになむだ…。

続く東一局一本場、ここでも原村さんが和了りを見せた。しかも電光石火の早和了りだ。

「だからっ！そーゆー速攻はうちのお株なんですけど…！」

「はあ〜」

すごい、やっぱり原村さんはすごい！

この一週間何度も一緒に打ったがその強さはいつ相手にしてもすごい！よーし…。

東一局二本場

眼を閉じ、静かに息を吸う。

「…すう…」

精神を集中させながら、ゆっくりと息を吐き出した。

「ハア…」

視界が澄み渡り、今まで見えなかったものが見えてくる。嶺上牌は…九筒…！

「カン」

そう

俺も嶺に咲く花のように…！

嶺上牌…九筒を引き寄せ、手牌を倒す。全てを筒子で染めたキレイな花がそこにはあった。

「嶺上開花自摸、門清」

「ば、倍萬…！」

「4200・8200」

|| || || || || || || ||

結局この半荘の結果は

俺

+32

原村さん +10

京ちゃん -12

優希ちゃん -30

で終わった。

「終わった…じえ…」

死んだように机に突っ伏す優希ちゃん。

「私はもうダメだ…後のことは頼みます、京太郎には一日4回エサをあげてください…」

「俺はペットかよ…和と咲也はつえーなあ」

「勝てないからつまんないじょー」

頬を膨らませて拗ねる優希ちゃん。原村さんはそんな彼女の肩に優しく手を置いて言った。

「次は勝ちましょう」

「うむ…」

勝てないからつまらない…か…。あの時の暗い気持ちだが、胸の中で目を覚ました気がした。

我ながら異常だと思う。たった三巡で役満、国士無双をテンパイしてしまったのだから。さらに京ちゃんが俺の和了り牌の九筒を切る。

…普通はここで和了るけど俺は九筒見送った。その直後。

「リーチ！調子が出てきたじえ〜！」

優希ちゃんのリーチ、できれば和了らせてあげたい。

俺が次に引いた牌は五筒：俺は右端の中と五筒の位置を入れ替え、改めて五筒を切った。これならみんなからは俺が『手牌の中から』五筒切ったように写るだろう。

そして切った五筒は…

「ローン！12000！」

案の定優希ちゃんの和了り牌だった。

「はい…」

「なあ咲也、なんでそんな牌切ってた？」

「ちよっ…！」

いきなり京ちゃんが俺の手牌を倒した。そして露になる国士無双聴牌：俺以外全員が顔を変えた。

「あー…こりゃ突っ張るわな…」

「三巡目にこれって人間ですか」

良かった…気づかれてないみたいだ…俺が和了れてたことは…。

いや、どうやら一人気づいていたみたいだ。俺に鋭い視線を投げ掛ける原村さん、やっぱり彼女の目は誤魔化せないか…。

なんだかんだで二回目も終了、一位はダントツトップの優希ちゃんだ。

「やったじえ！トップ！」

「僅差だな…咲也は…プラマイゼロか…」

「あ、うん…」

ガタンッ

不意打ち気味に響いた音。それは原村さんが勢いよく椅子から立ち上がった音だった。

「…今日はもう帰ります」

1週間前と同じ既視感、あの時は部長の言葉に背を押されたが今回は自分から動くことができた。
扉を潜る原村さんを追って、俺は走った。

「悪い！俺も今日は帰る！」

|||||

次に原村さんの後ろ姿を見たのはちょうど彼女が門を曲がった時だった。急いで後を追い声をかけた。

「原村さん！」

「…」

答えない、それでも構わない、俺は続けた。

「俺！麻雀部に入れてよかったです。原村さん打って楽しくて…」

そこで彼女踵を返した。その瞳には強い力が籠っていた。

「私は楽しくありませんよ！」

「え…」

体がピタリと動きを止めた。楽しくない？どうして…？

原村さんが近づいてくる。俺と原村さんの身長はだいたい同じくらいだ、だから近くで話すと自然と目と目が合うようになる。

「今の打ち方を続けるといふなら…」

俺は動けなかった。

その力強い瞳で見つめられ、金縛りにでもあったかのようだった。

「退部してください」

そしてその言葉は俺の思考を止めるには充分すぎる力を持っていた。

過去と指切り（前書き）

過去については完全に作者の妄想です。

過去と指切り

「え……」

突如投げ掛けられた否定の言葉。体が硬直して目の前が揺らいだ。原村さんが踵を返して歩いていく。少しずつ遠くなっていく。

「まつ…待って！」

我に帰り急いで原村さんを追った。距離は十歩程、だけどその十歩がひどく遠い気がした。

「なぜあの時、国土無双で和了らなかったんですか？」

「あれは…優希ちゃんが……」

楽しくなさそうだったから…そう言おうとした矢先に原村さんが言った。

「あの子とは中学から一緒でしたがそんなにヤワな子ではありません、友達を侮辱されたみたいで心外です」

「俺は…みんなにも楽しんでもらいたくて……」

「あなたが手加減してると『私は』楽しくありません…私も楽しませてください…!!」

そう…だったのか…。

俺はてつきり、俺の理不尽な和了りを嫌われているのだと思ってい

た。

けど違ったんだ。

原村さんは俺が手加減していたのを怒ってたんだ。

そう考えたら、少し安心した。嫌われるよりも怒られるのほうがずっと早く原因を解決できるから。

「う…うん、今度から全力でやる！」

「全力でなければ全国には行けませんよ」

え…？

「全国に行けない…？」

嫌だ。

それってつまり…姉ちゃんに会えないってことじゃないか…。

「それは困る…困るよ…俺は…全国に行きたい…全国に行かなきゃダメなんだ…！」

気づいたら全力で叫んでいた。原村さんが驚いた顔をしている。

「…理由を、聞かせてもらえませんか？」

|||||

俺の家はいわゆる普通の家庭だった。

どこにもある普通の四人家族。

大黒柱の父さんがいて、家事をしてくれる母さんがいて、長女の姉ちゃんがいて、俺がいる。

ごくごくありふれた平凡だけど幸せな家庭。

けれど1つだけ他と違う所があった。それはよく家族麻雀を打つということだった。

俺も五歳になったときくらいから麻雀を打ち始めた。

楽しかった。ただひたすらに楽しくて、時間を忘れて麻雀に取り組んでいた。初めて勝ったときは嬉しすぎてその場で何度も飛び跳ねた。

けれどいつからだったろうか…俺が勝つ度に姉ちゃん表情が曇っていくようになっていた。俺は、俺が勝ちすぎるから姉ちゃんが楽しくないと考えるようになった。

大好きな姉ちゃんが楽しくない。

それは俺にとって自分が楽しくないことと同意だった。

だから俺は、いつしかプライマイゼロを目指して打つようになった。これなら俺は勝たないし負けない。みんな楽しく麻雀ができる。そう思っていた。

けれど俺がプライマイゼロで打つのを気づいた人がいた…よりもよってそれは姉ちゃんだった。

俺が中学一年の秋のある日、姉ちゃんは今まで見たこともないような真剣な顔で俺に麻雀を挑んできた。姉ちゃんの勢いに押され、俺はその勝負を引き受けた。

その日の姉ちゃんの麻雀はすごく攻撃的で今でも覚えてる。あれは本気で俺を倒そうとしていた。

結果、俺は僅差で姉ちゃんに勝利した。勝利の喜びなんてものは沸

かなかった、あるのはただの疲労感と困惑…そして姉ちゃんを泣かせたという事実だけだった。

そして俺が中学二年生に進級したのと同時に、姉ちゃんは東京へと行ってしまった。俺に黙って東京の高校を受験していたらしい。母さんも、姉ちゃんを一人にできないと言って出て行ってしまった。たった一つの勝利が、俺の家族をバラバラにってしまった。

俺は…自然と麻雀から離れていった…。

|||||

「そう…じゃあお母さんとお姉さんは東京に…」

「うん…」

ずいぶん長く話し込んでいたらしい。気がつけば夕日が辺りをオレンジ色に照らしていた。原村さんには、俺の家族がバラバラになっているというのをかいつまんで話した。詳細を話す勇氣は…今の俺にはまだない。

俺は夕日の光を反射して輝く水面を見つめながら言った。

「一度…一人で東京まで会いに行ったことがあるんだ…けど姉ちゃんは一言も口を利いてくれなかった…たぶんまだ俺のこと怒ってるんだ…」

去年…中学三年生のときに会ったときの姉ちゃんは…なにも言わずにただ俺に帰り道を記したメモだけを渡して去って行ってしまった。

「けど麻雀なら…麻雀を通じてなら姉ちゃんと話せる気がするんだ

！」

「お姉さんはインターハイに出てくるんですか？」

「たぶん…優勝候補だつて本にも出てた」

「……！まさか…宮永くんのお姉さんの名前は…」

知ってるんだ…やっぱり姉ちゃんはすごいな…きつと麻雀をやつてる人はみんな姉ちゃんの名前をしってるんだろうな。雑誌を見たときと同じ、嬉しさと寂しさの入り交じつた感情を抱きながら、俺は姉ちゃんの名を口にした。

「『^{てる}照』つていうんだ」

すべてを照らす太陽みたいにいるんな人の注目を集める存在。今の姉ちゃんにはピッタリの名前だ。

「あなたにも色々あるんですね…」

「もつてことは…原村さんも？」

コクリと頷く原村さん。

そうか…この子にも、全国に行かなきゃならない理由があるんだ…。

「…じゃあ…俺…もつと頑張るから…」

立ち上がり、じつと原村さんを見つめる。なんだか一人じゃないつて思えて、嬉しかった。

「原村さん一緒に行こう！一緒に全国に行こう！！」

驚いたのか、原村さんはポカんと口を開けている。かどなぜか顔が赤い気がする。そんな顔もキレイだなって思った。

「じゃあもう、手加減とかしないでくださいねっ」

そう言うておずおずと左手の小指を差し出してくる原村さん。すぐにその意図を理解して、俺も小指を絡ませ、指切りした。

「うんっ！」

そっだ…全国に行けば姉ちゃんに会えるんだ！

お昼と見守り隊

寝坊した。

そのせいで弁当が作れなかった。

今日の昼ごはんは学食のおにぎりになった。

「ハア……」

だからため息も出るわけで……。

寝坊の理由はわかっている。昨日原村さんと指切りしたからだ。

家に帰ってあの出来事を思い返していくうちだんだん嬉しさと恥ずかしさが増していつて、そのままなかなか眠れない状態が続いた。べつにやらしいことをしたわけじゃないのになんでかな……？

何故か沸き上がる悶々とした気分を抱えながら通学路を歩いていると、見たことのある後ろ姿を発見した。

あれは……原村さんだ。

何やら立ち止まっているけどどうしたのだろうか？

思いきって話しかけてみることにした。

「原村さん、おはようー」

「えっ?! あ……宮永くん……」

少し驚いたようすで振り返る原村さん。

「お……おはようございます……き、今日から全国目指して特訓ですよ」

まだほんの少しだけとげのある言い方だけど挨拶をしてくれた。よかった…どうやら昨日までの妙な距離感はなくなったみたいだ。内心ホッと胸を撫で下ろしながら原村さんの隣に並んで言う。

「一緒に行こっか」

「そうですね…行きましょうか」

ゆっくりと二人で学校に歩いていく。その途中、原村さんが鞆を探り始めた。

「あの宮永くん…お返ししたいものがあります」

「お返し?」

そう言っって原村さんが取り出したのは…

「傘?」

「初めて麻雀部に来たときに私に貸してくれたものです」

「あゝ…そういうえば貸してたね、すっかり忘れてた」

「1週間も借りっぱなしで…本当にごめんなさい…」

「いいよ気にしないで、俺が勝手にやったことだしさ」

「それで…その…傘のお返しというわけではないんですけど…よければ今日のお昼ご一緒しませんか?」

顔を赤らめて言う原村さん。…す、すごく可愛いんですが…！

「お、俺なんかでいいのかな？」

「む、むしろ宮永くんだからいいというかその…」

「そそそ、そうですか！じ、じゃあ…その、ご、ご一緒させていただけます…」

ヤバイ！真っ直ぐに原村さんの顔が見れない！！

落ち着け俺！ただ一緒に昼ごはんを食べるだけじゃないか！そうだ、京ちゃんと一緒に食べるのと大差ない…筈だ！

二人して顔を真っ赤にしていたらいつの間にか学校にたどり着いていた。

「じゃあまたお昼に…」

「はい…」

本音を漏らせばもっと話したかったけどわがままはできないよな。

「さっくつやっ！」

「うわっ?!」

き、急に首が…この声は…

「京…ちゃんか…痛だだだ！」

「やるじゃね〜かさーくやー あの和と仲良くなった上に、一緒に昼飯なんてよ」

「と、とりあえず離せ〜！極ってる…」

「あ、ワリイ」

パツと俺の首から手を離す京ちゃん。

あ〜…痛かった…。

「でもま、俺は応援してるぜ？頑張れよ！」

ものすごく良い笑顔でサムズアップしてきた。……具体的に何を頑張ればいいんだ？ただ一緒に昼ごはんを食べるだけなのに…。

|||||

俺の名前は須賀京太郎、清澄高校一年生にして麻雀部員だ。

今俺はある重要な使命を帯びてある二人組を影から見守っている。

その二人とは、我が親友宮永咲也と美少女原村和だ。

ただ今二人は野原の上にシートを敷いて、昼食を始めようしている。咲也の奴はなんとも嬉しそうにニコニコ笑い、和の方は若干顔を赤らめながら弁当の蓋を開いている。

咲也はあれで結構鈍感だからな、せつかくのチャンスを棒に降りかねん。今後のアドバイスをするためにも俺は二人の行方を見届けねばならんだ。なにより面白そうだしな！

……なのに……

「何でおまえがここにいるタコス娘」

「貴様こそ何故こんなところにいるのだ」

「俺には咲也をバックアップする義務があるんだよ」

「私とてのどちらんを支援する責任があるのだ」

「「むむむ……」」

たまたま居合わせたタコス娘こと片岡優希とにらみ合うことに。

……イカン！こんなことしてる場合じゃない、二人はどうなった！？

シートの上に置かれた昼飯、和のは結構大きめな、重箱の一段目くらしい弁当でかなりのおかずが入っている。それに比べて咲也は…

「学食のおにぎりじゃねーか」

「ずいぶんと貧相だじえ」

たしかに優希の言う通り、まるで富豪と貧民の食事の差だな。

「宮永くん…おにぎりだけですか？」

「うん…作るの忘れちゃってね…」

恥ずかしそうに笑う咲也。

「咲ちゃんは料理できるのかー？」

「…あいつの家、母親がいねーんだよ。亡くなったわけじゃねーけど」

「ふむふむ…環境に応じて進化したわけだな」

そんなことを言ってる間に和が弁当を咲也の前に押し出した。

「よろしければいかがですか、多目に作ってきましたから」

「おお！チャンス到来だぞ咲也！そこは『原村さん、食べさせてと多少強引にでも頼んで…』」

「いいの？じゃあいただきます…もぐもぐ…」

普通に食うなああああ！

せっかくのチャンスをおまえなにやってんの!?

「おいしい！原村さんって料理上手なんだね！」

おお！結果オーライだぞ咲也！褒めるのは正解だ和の顔がみるみる赤くなっていく。

「のどちゃ〜ん、そこは『宮永くんのために頑張って作りましたから』って言うってポイントアップを狙うんだじえ！」

わかってるじゃねーかタコス娘！

さて和はどっ出る？

「く…空腹のせいで部活で負けられても困りますから…」

「スコ」

二人一緒にずっこける。だ、ダメだあいつら…はやくなんとかしないと…。

「やっぱのどちゃんは男より麻雀なのかなー？」

「うん咲也の鈍感もなんとかしねーとなー…」

がささそ…

「ってそれ俺の肉まんじゃねえか」

「ちっ」

「かえせよ」

「あっ」

ドサッ

何故か優希を押し倒す形に…何でだ？

「い、今はダメっ」

なにがだ！！

メイドとペンギン

なんだかんだで放課後になってただ今部室で読書中。

優希ちゃんはタコスを食べ、京ちゃんはお茶を淹れて、原村さんは睡眠中。

ほのぼのとした空気の中、突然部長の声。

「はいちゅーもーく。タコス食ってる子も寝てる子も集まれー」

とりあえず全員集合。

ホワイトボードにでかかど書かれている文字を声に出さずに読んだ。

『目指せ！全国高校生麻雀大会県予選突破！！』

「というわけでっ来月頭に県予選があります、今年からウチも参加することになりました！」

そう言ってかなり量のある紙束を取りだし、机の上に置いた。

「これはルールと県強豪校の牌譜。パソコンにも入ってるから目を通しておくように」

「パソコン使うじえ」

ルール確認は大切だな、どれどれ…

「全員で10万点もち」

「5人で交代？なんだこれ」

「質問は後で聞くから各自確認しといて」

そうだな…今のうちにしつかり確認しないと。

あ、ダブル役満無しなんだ…。

赤ドラはあるのにダブルは無し…変わったルールだな。
あれ？そういえば…

「今年から男女混合なのか…」

「じゃあ一人余るな」

「あ、須賀くんは補欠に回ってちょうだい」

「何で!？」

「下手すぎるから」

ザクッ!!

一刀両断

崩れ落ちる京ちゃん、哀れだ。

そして笑顔で切り捨てる部長、鬼だ。

三角座りで落ち込む京ちゃんを慰めていると、パソコンを使っていた優希ちゃんから声が上がった。

「ちよっ…ワケわかんないですケドこのひと…」

何事かと思つて優希ちゃんがいじっていたパソコンを見る、そこにあるのは牌譜。

……なるほど、こりゃたしかに変だ。

「ああ…龍門渚の天江か」

「咲ちゃんより変だじよ」

…ちよつとシヨック…。

京ちゃんの隣で三角座りをしてしまつくらいのシヨック。

「6年連続県代表だった風越女子が去年は決勝で龍門渚に惨敗したのよ。天江を筆頭とした当時の新1年生5人にも足も出なかったの」

「だが今年はのどちゃんを擁する清澄うちはの1年がそいつらを倒す!! 歴史はくりかえすのだ!!」

優希ちゃん前向きだなあ…。

なんて考えてたらいきなり肩を組まれた。

「咲也もいるしな!」

「…京ちゃん回復早いね…」

「それが俺の取り柄だ」

いいなあ…それに比べて俺はちよつとしたことでいちいち傷ついて落ち込む根暗野郎…あれ?何故か涙が…。

「そういえば染谷先輩は今日は来ないんですか？」

そういえば居ないな…どうしたんだろう？

「おお忘れてた。まこの家は喫茶店をやってるんだけどね、かき入れ時な上に今日はバイトの子が病欠らしくて人手が足りないらしいのよ」

「じゃあ染谷先輩もウエイトレスを？」

そこでチラッと俺と原村さんを見る部長。

…あの図書室のときのような嫌な予感が…。

「というわけで和に宮永くん、2人で手伝いに行ってくれない？」

嫌な予感的中。

「…部長は行かないんですか？」

「ほら私18歳になってないから、学祭の準備もあるし」

…俺はまだ15歳なんですけど…。

……………。

……………。

……………。

その後なんか流されるままに手伝いに行くことに。

部長は悪い人じゃないんだけどあの自由奔放な所がなあ…悪い人じ

やないんだけど。

2人並んで、他愛もないこと話しているうちに、喫茶店…つまりは染谷先輩の家の前に着いた。そこで俺達を待っていたのは、メイド姿の染谷先輩だった。

漫画やドラマなんかでよく見るエプロンドレス。素直に似合ってると思う。

「よう来たのう」

染谷先輩の隣、看板に目をやると…

『本日メイドデー!!』

…つまり、どういふことだ？

「よろしくな！」

「はい？」

……。

……。

……。

「お帰りなさいませ、御主人様」

目の前に現れたのは、可愛いミニスカメイドだった。

ピンクと白の二色の服、生地が薄いのか原村さんのスタイルのよさがよくでてている。

動く度に…その…胸が揺れて…目のやり場に困る。

「なかなか似合うとるねー」

「ホントにスゴく似合ってる……」

「そ、そうですか…?」

「うん、スゴく可愛い……」

「ハイハイあんたはこっちじゃ」

「うわっ」

腕を引っ張られ、更衣室に放り込まれる。ドアの向こうから染谷先輩の声が聞こえてきた。

『その段ボールに入るとるから、早う着替えて来いよ』

段ボールって、ああこれが。

ガサゴソ

「こ、これは…?」

……。

……。

……。

俺の姿を見た瞬間、原村さんが目の色を変えた。

当たり前か、ふつつ目の前にこんなのが出てきたらビビるよな。

「おお！サイズは合っとったようじゃな」

「染谷先輩」

「なんじゃ？」

「何で俺はペンギンの着ぐるみなんですか？」

「ん？和と同じがよかったか？あんたの分のメイド服もあるよ」

そう言つてどこからかメイド服を取り出した染谷先輩。デザインは同じだがピンクが水色に変わっている。

それを見た瞬間、反論するだけ無駄だと悟った。

「喜んでペンギンでやらせていただきます……」

「エトペン……」

「ん？何か言つた原村さん？」

「い、いえ何も」

？なんか俺を見る目が妙に熱いような……気のせいかな。

……。
……。
……。

「八番テーブル、パスタです」

原村さんの元気な声が店内に響く。
今日初めて仕事をするとはいえない馴染みっぷりだ。

「和は順応早いのお」

「そうですね…」

「あなたはどつじゃ、その着ぐるみ？」

「熱いし、動きにくいし、ハズいです」

「くくっ、そうかい」

「……面白がってます？」

「うむ」

「……厨房の方にまわしてもらってもいいですか？このままだと何時食器落とすか戦々恐々で…」

そんなときにドアの開く音が。

見れば男の人が2人入店してきた。

「お帰りなさいませ、御主人様」

「いらっしゃいませー」

俺を見た瞬間に固まるのには慣れた。

「雀卓空いてるか？」

「はい、二名様麻雀卓にごあんなーい」

……なるほど、部長が俺達をここに来させたのはそれが理由か…。
つまりは部員以外の人間と打たせて実力アップをさせるわけだ。

……よし、それなら望むところだ。ドンドン打ってやる！

……。
……。
……。

遠くの山に、夕日が隠れようとしていた。

暖かくなってきたとはいえ、まだまだ昼は短い。

「はあ…あいつら…大丈夫かな？」

染谷先輩の家に行った咲也と和、もうそろそろ帰ってきてもいい頃だが…。

親友としてかなり心配だ。

もしかや2人で帰りにデートなんて……あり得ないな咲也だし。

「しかしコスプレか…見てみたかったな…」

今日はメイドデーということで従業員はメイド服で働くらしいが、和はもちろんだが咲也の奴もけっこう女装似合うんだよな。

初めて見たときは咲也だとわかっていながらクラツと来たからなあ。

「そんなこともあるのかと!！」

「ん？」

相変わらず喧しい優希の声に振り替えるとそこには…メイドがいた。

「服を借りてきてあるじえ！！」

ベーシックだが定番の黒と白のメイド服。
これは……なかなか。

「けっこう似合ってるな」

「んなつ！？」

正直な感想を述べると、何故か驚く優希。ホントに何でだ？

「馬子にも衣装だな」

「な、なにおー！」

「てか何でメイド服借りてきたんだ？」

「最下位の罰ゲームで貴様に着せるためさ」

「な、なんて恐ろしいことを考えるやつだ……」

「…まあ心配無用だじえ！あの2人の雀荘でも勝ちまくってるじよ
！」

「だな」

和も咲也も、とんでもなく強い。短い時間だがあの2人と直接戦ったからよくわかる。

「それはどーかしらね」

「え？」

「むむつ、部長がなにか企んでるじよ！」

「ふふつ、実は知り合いのプロにちょっと頼みごとをしてね。2人を徹底的にへこませてくれ』ってお願いしてあるの」

常になんか企んでるイメージがあったけどそんなことを…。
なるほど、へこませて向上心アップを狙うつもりか…けど…。

「へこむのはそのプロの方かも…」

「ん？なにか言ったか京太郎」

「いや、なんでも。ほら帰るぞタコス娘」

「あ、待て！せめて着替えさろー！」

「外で待ってやるからさっさと着替えてこい。じゃあ部長、お先に失礼します」

「？」

京太郎、そして優希が出ていき久だけが残った部室。備え付けの時計は七時半を示していた。

静寂のなか、唐突に久の携帯が鳴った。

「もしもし」

『久か、私だ』

「あら、ヤスコ終わったの？」

『ああ…』

「お疲れ、でどうだった？」

『どうもこうもない』

「やっぱりあの子達じゃまだ相手には…『惨敗だ』……………え？」

『まさかこの私が一度もトップを取れないとはな…さすがは宮永照の弟といった所だな』

「……………そう、宮永くんはそれほどまで……………和はどう？」

『あっちはダメだ、現実に左右されて相手にならなかった』

「そっか…」

『それと宮永の方も問題点はあるぞ』

「なに？」

『勝つ度に表情が曇っていった。あれじゃあそのうち麻雀を打たなくなるぞ』

「楽しめてない…ってことね」

『そういった所だな、じゃあ切るぞ』

「ええありがとねヤスコ」

「やっぱり…俺ってダメなやつだよ…」

喫茶店からの帰り道。ポツリと呟いた一言で、2人とも立ち止まった。

辺りはもう真つ暗だ。

「麻雀を好きになるとか言っときながら…全然麻雀を楽しめてない…。これじゃあ部活に入る前と変わらないよ…」

突然喫茶店に現れたのプロ雀士『カツ井さん』（勝手に命名）。強かった。ただひたすら強くて、昔の姉ちゃんと戦ってる気分になった。

けど、勝てた。

結果的に俺は勝った。

5回打って、5回とも俺はトップ。2位がカツ井さん、3位が原村さんという形が5回続いた。

嬉しいはずだ。ふつうの人間なら、プロに勝ったんだから喜ぶはずだ。

けど、ダメだった。

勝つ度に、あの時の姉ちゃんの顔が浮かんだ。

申し訳ないという傲慢な気持ちが生まれた。

自分で自分の首を閉めながら打ってる気分だった。

「こんなんじゃ…とても大会なんて…」

出れない、そう言おうとした時だった。

パン

高い音が響いた。

右の頬がやけに熱い。

何が起きたのか、わからなかった。

けどすぐに理解した。原村さんに叩かれたということ。

「何をいつてるんですか…全国に行かなきゃダメっていったのはあなたでしょう！こんなことでメソメソしないでください！」

強い意思を持った瞳。昨日も見たことがある。

俺に退部しろと迫ったときの…。

「私達は行くんです…全国に！」

そうだ…約束したんじゃないか…指切りしたんじゃないか…。

「まだ県予選まで10日あります…この10日で誰よりも麻雀を好きになればいいんです！」

「原村さん…」

「私もこの10日で誰よりも強くなるように努力します。だからあなたも…！」

ああ…強いな…この人は、俺なんかよりもずっと…。

きつと心から麻雀が好きだから、こう言えるんだろうな…。

俺も…なれるかな？この人みたいに強く…。

いや…なるんだ！彼女に負けなくらいに、麻雀を好きになるんだ
！！

「わかったよ…原村さん…。行こう、部長の所に！」

メイドとペンギン（後書き）

というわけで藤田さんの勝たせてみました。咲也を和にはたかせることにも成功したし、次回は合宿です。

温泉と親友（前書き）

家族がいなくなったら、辛いですよね…。

温泉と親友

「はいあなた、あ〜ん」

そう言っつて優希ちゃんが差し出したお箸は

コッソ

京ちゃんのほつぺたに直撃した。

「イテツ、あなたじゃねー！」

「イヤン 怒っちゃやーよあ・な・た」

「あなたじゃねー！」

じゃれ合い始める2人、本当に2人は仲が良いなあ。

いま俺達清澄高校麻雀部はバスに乗ってとある場所へと向かっている。目的は特訓のため、強くなるため、そして大会で優勝するためだ。

俺達は清澄高校付属の合宿所へと向かっていた。

なぜこうなったのかというと、それはあの日の後俺と原村さんは部長の元に行った。合宿をしよう頼むためにだ。

ところが部長は既に合宿所を押さえていて今こうやってバスに乗っているというわけなのだ。

…考えてみれば、俺達が染谷先輩の家に手伝いに行くことになったのも部長の指示だった。そこから俺達が戻ってくることで計算に

入れていたというのなら…部長は本当に読めない人だな…。

「あの…宮永くん…」

「ん？どうしたの原村さん」

俺の隣に座っている原村さんが話しかけてくる、気のせいか少し辛そうな表情だ。車に酔ったのかな？

「あの…ですね」

「うん」

「その…ですね」

「うん何？」

「右の…ほっぺは…」

「右の？……あーあの時の事？」

あの時とは、俺が原村さんに叩かれた事だ。最初は驚いたが今にして思えばウジウジしていた俺の目を覚まさせてくれた。

「私…ついカツとなって…本当にごめんなさい」

「いいよ、もとはといえば俺が悪いんだしさ」

「でも痕が残ったりしたら…」

「俺の顔に痕はある？」

「…いえ」

「なら大丈夫だよ、原村さんは気にしてるみたいだけどあのお陰で目が覚めたんだからさ、むしろありがたいくらいだよ」

「えっ！？み、宮永くんは叩かれるのが好きなんですか？」

「…いやそうじゃなくてだね…単純に俺を叱ってくれたのが嬉しかっただけってことだよ、あれのお陰で目が覚めたしね」

「そう、なんですか？」

「だから気にしないで、俺も気にしないから」

微笑んで言うと、原村さんも安心したようで、笑い返してくれた。

よかった…原村さんが俺のせいで暗くなるなんて、嫌だらな。

「あ！見えたじえ！！！」

窓の外を見る優希ちゃんにつられて同じ方向に目を向けると……たしかに見えた。あれが…俺達の合宿所…！

|||||

「着いたじえ」

合宿所は、見た目は大きな講堂って感じだったけど、中身は旅館み

たいたった。障子や箆笥があるし…和風を醸し出している。

「おも…」

異常に膨らんだりリュックを背負って入室してくる京ちゃん。いったいなに持ってきたんだ？

「さて、じゃあ全員揃ったところで…」

「お、早速か？」

部長に一齐に視線が集まる。

…いよいよ始まるんだ…合宿が…！

部長は頷き、口を開き、そして…

「まずは温泉よね…！」

…はい？

…。

…。

…。

立ち上る湯煙が、お湯の熱さを知らせていた。まさか露天風呂とは…特訓ではなく入浴が先なのは少々気になったけど、この温泉を見ていると部長の気持ちもわかる気がする。

「スゲーな…」

「うん…」

「よっしゃー一番乗りー！」

「あ、ちょ、京ちゃん！いきなり入ったりしたら…」

バツシャアアアアン

「あつちやああああー！！！！」

「…そうなるから気をつけろって言おうとしたのに…」

とりあえず悲鳴を上げる京ちゃんは置いて、桶でお湯を掬ってそれを被る。

うん、熱いけどいい温度だ。

それから呼吸を止めてゆっくりとお湯に体を入れる、足、膝、腹、胸、そして肩まで来たところで一気に息を吐いた。

「ハア…」

いいお湯だなあ…体全体が包まれて…気持ちいい。

京ちゃんもお湯の温度に慣れたのだろう。泳いで俺の方にやって来た。

「疲れた体に染みるなー」

「そついえば京ちゃん、なんかでっかい荷物持ってきてたもんね。あれなんなの？」

「ん〜？部長曰くおまえの特訓メニューらしい」

「俺の…特訓メニュー…」

「麻雀を好きになるための…な」

「そっか…じゃあ京ちゃんには感謝しないとね」

「え？何で？」

キョトンとした顔の京ちゃんに俺は言う。

「だって俺のためにわざわざ重い荷物をはこんできてくれたんだろ？だからありがとう」

「いーってべつに、友達、だろ？」

そう言っつて拳をつき出してくる京ちゃん。俺もそれに応えて拳をつき出した。

コッソ

湯煙のなか、音が一つ響く。

いつもそうだ。

京ちゃんはなにも言わずに俺を助けてくれる。

そう…あの時も…。

空へと消えていく湯気を見つめながら、俺は過去を思い返した。

.....。

中学でできた初めての友達。それが咲也だった。普通に仲良くなつて、普通に遊びあつて、普通に家に呼んだり呼ばれたりして……。ふざけ合う事ができる、気がおける親友。本ばかり読んでる咲也をグラウンドに連れ出す事も多かった。

けど、一年度の終わりくらいから、咲也の様子が変わった。急に口数は減り、目も虚ろで今まで以上に本を読むことが増えていった。俺が話しかけても、答えなくなるがあった。

そのまま迎えた中学二年の春、咲也とはまた同じクラスになった。

人間は第一印象で他人を判断するというが、新しいクラスの一部の奴等には、当時の咲也はいいオモチャに見えたらしい。愚かしい事に、そいつらは咲也に対してイジメを始めた。そして俺が、咲也がイジメられているということ気づくまで、実に1ヶ月の時が必要だった。

ある日のこと、咲也の顔に大きな絆創膏が貼られているのを見つけた俺は、問いただした。

何故、そんなものが貼られているのかと。

咲也は答えず、ただひたすら本に目を通していた。

その時の俺は、1ヶ月にわたる親友の無言の拒絶による苛立ちが最高潮に達していて、そして最後の1線が、この時の咲也の無視で壊れてしまった。

ただ体の動くままに、咲也の胸ぐらを掴んで立たせた。机や椅子が倒れ、その音に驚いたクラスメイト達が俺達を凝視していたが、そ

んなことはどうでもよかった。

「何で黙ってたんだよ…！」

咲也は答えない、ただ虚ろな目で俺を見つめてくる。

「何でなにも言わねーんだよ…！何で話さねーんだよ！何で相談しねーんだよ…！何で頼ってこねーんだよ…！！！」

虚ろな瞳がほんの少しだけ揺らぐ。

「俺はそんなに頼りないか！？そんなに信用できないか！？」

「……………京ちゃんに……………迷惑…かかるから…」

久し振りに聞く咲也の声。懐かしく、弱々しい声だった。

「ふざけんな…！一人でなんでもできると思ってたのか！？自惚れんのも大概にしろ…！！！」

「どうしろって……………いうんだよ…」

瞳の揺らぎが大きくなる、少しづつ少しづつ、光が戻ってくる。

俺は手を離し、今度は親友の肩を掴んだ。

「頼れ…！！！」

「たよ…る…」

「そうだ！そして相談しろ…！何があったのか、何で黙ってるのか、

どうしてそんな風になったのかを……!!」

ボロボロと、咲也の両の目から雫がこぼれていく。それは今まで溜め込んできた、苦しみ、痛み、悲しみ、ありとあらゆる負の感情だったのだろう。

目を擦り、嗚咽しながら、咲也は言った。

「京……ちゃん……、ウッ、京ちゃんは……ヒック、ど、ウッ、どーして……お、れに、ここまで、して……してくれるの?」

「決まってるだろーが」

肩を掴む手に力を込めながら、俺はできるだけ優しく諭した。

「友達だからだ」

その言葉が、最後の引き金だったのか、咲也は人目も気にせず大声を上げて、ただ泣いた。

その後は簡単だった。咲也の話からイジメのグループを探りだし、そのバカどもにちよつとした『おしおき』を加えてやればあら不思議。咲也へのイジメはすっかり消え去った。そして咲也もかつての明るさを取り戻してくれた。

そして今、俺達は同じ高校で同じ部活に所属して、合宿を受けている。

…

「ゴクツ…ゴクツ…プハア！」

乾いた喉を通りすぎる牛乳を飲み干し、至福の一時を楽しむ。やっば風呂上がりは牛乳だよな…。けど…。

「毎日飲んでるのに…伸びないなあ…」

「まだ身長気にしてたのか…」

「京ちゃんはいいよなー…身長高くてさ…」

「ふ…まあな」

キラリと齒を輝かせる京ちゃん。

「俺も京ちゃんくらいあればなー…」

「和に振り向いてもらえるかも…か？」

「な、なんでそこで原村さんが出てくんだよ！」

「べつつに…？それより、あの荷物運ぶの手伝ってくれよ」

「…はぐらかされたけど、いいよ手伝う」

「さっすが咲也」

俺は笑って答える。俺を助けてくれる、カッコいいけど残念な親友に。

「友達、だろ？」

温泉と親友（後書き）

友達がいるって、素晴らしい事ですよ。

特訓と感謝

「いっちに、いっちに…」

「…お、重い…」

風呂上がり、浴衣に着替えて荷物運びを開始したけど…結構重い…。
2人がかりでもかなりの重量だ。
京ちゃんはこんなに重いのを1人で運んだのか…。

「部屋はここだったけ？」

「おう、んじゃ一回降ろすぞ」

「うん、せーの…」

ドスン

あゝ…腰が痛い…。

「さっさと部屋の中はこんじゃまおうぜ」

「うん」

そうしてドアを開いた。

そして俺の目に飛び込んできたのは…

「ふ…いい仕事したじえ」

「う…う…」

物凄くいい笑顔で額の汗をぬぐう優希ちゃん、その足元には…原村さんが横たわっていた。それだけならいい、問題はその格好だ。髪は乱れ、所々浴衣ははだけ、ギリギリで本当にギリギリのところで大変な部分が隠れている。白くてキレイな肌、されけだされた形のいい太もも、目は潤んで頬が紅くて…非常に扇情的だ…。

そんな潤んだ瞳が

「あ…」

「う…」

俺を捉えて

「キ…」

「ちよ！」

驚愕の色に変わるのを見て

「キ…」

「ちょっと待って！」

本能的に危険だと察知し

ボタン！

「おう！」

「あなたにはこれをやってもらいます」

そう言っただけで部長が取り出したのは一冊の冊子、表紙には『中学の数学』と書かれている。

つまり…数学のドリルってことかな？

受け取った優希ちゃんが明らかに嫌そうな表情をした。

「な、何でこんなものを？」

たしかにその通りだ、麻雀と数学になんの関係が…イヤ待てよ。たしかに優希ちゃんって…。

「わら点数計算が下手すぎるからじゃ」

染谷先輩の言う通り、優希ちゃんは結構な確率で点数計算を間違っていることがある。なるほど、そのための数学ドリルか。

隣で京ちゃんが優希ちゃんの頭を突っついていじっている、京ちゃん…そこは慰めてあげなよ…。

「それから和」

「は、はい！」

「あなたはネット麻雀では高いトップ率を取る理詰めの打ち方ができてる。だけどリアルではその場の勢いに流されたりしてミスが目立つように見えるわ」

「そつで…しょうか？」

「この前の時もそうじゃ、いくらプロが相手でも本来のわれの力ならもつと善戦できたはずじゃ」

たしかに…原村さんはたまにちよつとしたミスをすることが多い気がする。カツ井さんにも、そこを突かれて和了られたのを覚えている。

俺がカツ井さんとの勝負の記憶を遡る隣で、京ちゃんの突つつきに怒った優希ちゃんが京ちゃんを吹っ飛ばした。そのまま京ちゃんの背中に乗っかって逆に京ちゃんを突つついている。仲がいいなあ…。

「これは私の推測だけ…：ネットにはないリアルの情報量が思考を狂わせてるのかも」

「咲也の存在とかな」

「なっ」

？

どういうことだろう？それってもしかして…俺って原村さんにとって邪魔ってことかな？…へこみそうだ。

「だからこれから毎日一時間、牌をツモって切る動作だけを繰り返してみて」

「それって…素振り…？」

京ちゃんが口を開くと同時に優希ちゃんがヒップドロップを始めた。

仲がいいなあ…。

「ネットにはないそれらの動作を無意識にできるまで特訓してみた。それで強くなるのかな？でも不思議と部長の言葉には説得力があった。そして次に部長が見たのは、俺だった。」

「逆にリアルな情報を読み取るからこそ強い人もいる、宮永くんなんかは特にそうね。普通じゃ見えてないものまで見えてそうね…」
見えるか…たしかに集中したときは嶺上牌とか、次の自摸牌が見えるなあ…。

「君は逆にリアルな牌を使わないネット麻雀を打つてみたらどうかしら？」

「あ…俺、PCとか持ってなくて…」

「…ええ…っ!?!?」「」「」

部長以外の全員から驚きの声上がる。そんなに変なのかな？

「そんなこともあるつかと…須賀くん！」

「ふっ…ようやく俺の出番ってわけだ…」

さつきまでのしかかりを受けていたとは思えないほど軽快な動きで京ちゃんが取り出したもの…それは…。

「じゃじゃーん!!部室のPC、持ってきましたあ!!」

たしかに、目の前にあるのは部室で見かけたPCだ。あの重たい荷物はこれだったのか…。

「…ノートでよかったのでわ？」

「部室にノートがなかったの！！ていうか！！重かったああああ！！！」

「よしよし、私が慰めてやろう」

その場でおいおいと泣き始める京ちゃんとその頭を撫でる優希ちゃん…仲がいいなあ…。

「打ち方は須賀くんに教えてもらって、それじゃあ特訓開始よ！」

「……………はい！」「……………」

。

「どう？初めてのネット麻雀は？」

「部長」

ネット麻雀を始めて一時間くらい経った頃、部長が話しかけてきた。

「そうですね…何だか楽しいです！顔は見えないけど、色んな人と打って、その人がどういう打ち方してくるのかを考えたりしながら打って…頭を使って打つのも楽しいんですね！」

「今まではあまり考えずに打ってきてたの？」

「ええまあ……」

俺は牌を切るとき相手の捨て牌を見ることが殆どなかった。通りそうと感じた牌を切るのが俺のやり方だった……けどこのネット麻雀は違った。

なにを切るにも考えなきゃいけない、相手の捨て牌から役を想像して、どの牌が相手の手にあるか頭を働かせなければいけなかった。それが新鮮で、楽しかった。

「麻雀って……こんなに楽しいものなんですよね……」

「フフ……今頃気づいたの？」

「はい！部長のお陰です、ありがとうございます」

「礼には及ばないわよ、頑張りなさいよ咲也」

「はい！……ん？」

なんか違和感が……さっきと何か違うような……何だろう？部長にそれを尋ねようとしたりけど、部長は雀卓に戻ってしまった。

後で気づいたけど、違和感の正体は部長が俺のことを名前で呼んだことだった。認めてもらえたってことでいいのかな？

。

その夜……。

『お子様だじえ〜!』

『も、もう寝ます!』

『お子様お子様〜!』

『寝ます!』

隣の女子部屋からきこえてくる賑やかな声。とっても楽しそうだ。それに比べてこっちの男子部屋は男2人で使うには無駄に広い…何故だか虚しさが込み上げてくる。

「俺達だけ別室か…」

「当たり前だけどね…」

「寂しいな…」

「でも俺は感謝してるよ?」

「なんで?」

「だってあの時京ちゃんが俺を麻雀に誘ってくれなかったら、俺今頃なにもせずに家で寝てたと思う。だから京ちゃんには凄く感謝してる」

「咲也…」

「ありがとね京ちゃん」

笑顔で、隣の親友に感謝の意を伝えた。

京ちゃんは照れ臭そうにニカツと笑って答えてくれた。

「どーいたしましてだ」

特訓と感謝（後書き）

原作で咲が京ちゃんになにも言ってなかったのに疑問を感じた結果、
こうなりました。男同士だと色々と気楽でしょうからね。

終わりと滝（前書き）

ちよつとだけ『彼女』を登場させます。

京ちゃんの叫びが響く。

大丈夫だよ京ちゃん。俺はなにも見てないしなにも聞いてない。だけれど時と場所は選ぼうな？

笑顔で親友を祝福していると後ろから走ってきたその親友に肩を掴まれた。

「違うからな！おまえが思ってるようなことは一切してなからな！？」

「隠さなくてもいいよ。それより早く戻らないと優希ちゃんが待ってるよ？」

「ヤメテ！！そんな輝く笑顔で俺を諭さないで！！」

「お幸せに、優しくしてあげなよ」

そんなやりとりを繰り返している...

「あさっばらからなに騒いでんのよ」

何故か浴衣ではなくジャージ姿の部長がやってきた。

.....。

.....。

.....。

「つまり、優希ちゃんに目覚めのストンピングを喰らって京ちゃん

が怒って、そのまま取っ組み合いに発展、さらにそのままさつきみたいな体勢になってしまった…ってことだね？」

「そーゆーことだ」

「お騒がせして申し訳ないじえ〜」

やれやれと疲れた表情の京ちゃんとカラカラと笑う優希ちゃん。

なんだそうだったのか…勘違いしてたとは、ちょっと恥ずかしいな。話が一段落ついたところで部長が口を開いた。

「それじゃあ問題も解決したし、さっそく行くわよ!!」

「どこにですか？」

「早朝ランニング」

「そのために私が起こしに来たのだ」

ランニングか…麻雀には関係ないかなあ？

……。
……。
……。

「和はペンギンを抱きながら打ってちょうだい」

「えっ…!?!」

ランニングも終わっていざ特訓…となろうとしたところで部長が謎の発言をした。意味がわからず質問する。

「ペンギン…ってどういう意味ですか部長？」

「和の抱き枕のことよ」

「のどちゃんはそれがないと眠れないんだじえ〜」

「そんなことは！…ありますけど…」

何故か俺の方をチラチラと見る原村さん。しかし意外だな…原村さんって誰にでも敬語で礼儀正しいから大人っぽい印象があったけど、案外子供っぽい所もあったんだな…。

俺が一人で原村さんの知られざる一面について考えてる間に、原村さんは件のペンギンを持ってきた。一般的に知られている縦長のペンギンではなく、丸い形の体に手足の付いた特徴的なペンギン…というかこれって…

「俺が着てたきぐるみ？」

そう、染谷先輩の家に手伝いにいったあの日に着たあのペンギンのきぐるみ、それを小さくしたものが原村さんの両手に包まれていた。

「何故…エトペンを抱きながらなんですか？」

「あなたは自宅でのネット麻雀ではかなり強い、ペンギンを抱くと自宅と同じように眠れるならペンギンを抱けば自宅と同じように打てるかもしれない」

適当な思い付きのような気がする…。

「恥ずかしくて逆に落ち着かないですよ…」

「県予選までにそれに慣れること！」

「まさか…これを大会に…？」

「そのまさかで！」

「正気か（ですか）！？」「」

俺と京ちゃんのダブルツツコミを華麗にスルーする部長。

顔を真っ赤にして、それでもペンギンを抱き続けながら打つ原村さん、大丈夫だろうか？

様々な不安を抱えながらも、合宿の日々は過ぎていった。

そして合宿の最終日…正確には帰る前日の特訓が終わった時、俺は疲れから雀卓に突っ伏していた。窓を見ると、もうすっかり日が暮れてしまっている。

「終わった…」

「なに言うところんじゃない」

「ふえ？」

顔をあげるとそこには腕組をして不敵に笑う染谷先輩が。

「ここからは…」

その眼鏡がキラリと光ったかと思うと…次の瞬間、いきなり叫んだ。

「打ち上げじゃああああ!!」

。

目の前にあるのは、日本の伝統的な料理のひとつである寿司。それもかなり大きな皿に盛り付けられてる。軽く百個くらいはあるんじゃないかな？

その豪華さに一年生は感嘆の息を漏らした。

そしていただきますの直後に勃発した第一回清澄寿司取り大戦。

「タコとつたじえ〜!!」

「タコよりウニ!!」

「ウニよりイクラ!!」

あっという間に蹂躪されていくタコ、ウニ、イクラ達。参戦せずに中立を保っていた俺と原村さんと部長は、平和的に分け合って食事した。

それにしてもあの三人はもう少し行儀よく食べれないのかな？呆れてもしょうがないので原村さんに話しかけることにした。

「美味しいね、原村さん」

「そうですね…お寿司もが美味しいのはもちろんですけど、みんな

とお食事することができてよかったです」

「今まで友達と食事したことなかったの？」

「お食事だけでしたらゆーきと何度かしたことがありますけど…：こんなにたくさんの人と一緒に食べるのは初めてなんです、だから嬉しくて」

「そっか…：よかった、俺もちょっとは原村さんの役に立ってるんだね、嬉しいな」

笑うと、何故か顔を赤くする原村さん。

「わ、私も…：宮永くんとお食事できて…：その、嬉しいです…：」

「っ…：」

言われて、急に恥ずかしくなり顔を背けてしまった。
部長が凄くニヤニヤしていたように見えたのはきつと気のせいだろう。

。

プカプカと体が浮いてるような、不思議な感覚。
この感覚は知っている。夢を見るときのものだ。
ゆっくりと瞼を上げて、夢の世界を見渡した。

澄みきつた青い空、緑色の大地、遠くにそびえ立つ高山。柔らかな風が吹いて、草木を揺らした。

俺は山の頂点の木にもたれている。

ここは…：知っている。昔姉ちゃんと一緒に着た場所だ。

嶺上開花の意味を教えてもらった場所。俺はそこにいた。

「？」

感覚が戻るにつれて、違和感に気づいた。右手になにかを握っている。

首を動かして見ると、そこには…女の子がいた。

来ているのは清澄の制服。身長は俺と殆ど一緒で、どこか幼さを感じる。けれど何て言うか…どこか純朴そうな感じがする。

そして何故か俺は、この女の子の手を握っていた。

「スー…スー…」

心地良さそうに寝息を立てる女の子、どういうわけか、その眠りを邪魔してはいけないと思った。

しばらく女の子の顔を見てると、女の子は目覚めた。

そして俺と同じように違和感に気づいたのか、先ほどの俺と同じように、しかし逆方向に首を動かした。

目と目が合う。

そして流れる沈黙。

先に破ったのは俺だった。

「…おはよう」

「お、おはよう」

変な夢だ。

ただどこの子からは何故か…奇妙な親近感を覚える。

理由はない、ただそう感じるだけ。けどそれで充分だった。

「変な夢だね…」

「そうだね…」

「夢なら覚めなきゃね…」

「そうだね…」

「俺は大会に行かなきゃならないから…」

「私も…県予選に出ないと…」

ちよつと驚く。

「そっか…じゃあお互い頑張らないと」

「そうだね、私頑張るよ。だから君も…」

「うん…」

再び、不思議な浮遊感が俺を襲う。夢の終わりなのだと、理解した。急激な眠気のなか、女の子を見つめる。彼女も俺を見つめていた。

「いつか…また」

「うん…きっと」

瞼を閉じ、俺は夢の中から抜け出した。

。

奇妙な夢を見た気がする。

でも内容はよく覚えていない。不思議だ。

変に頭が冴えて、スッキリした気分で目が覚めた。

「ん〜…」

大きく伸びをして隣の京ちゃんに目を移す。掛け布団がずれていた
ので直してあげた。

まだ朝食まで時間があるしどうしようかな？

気がつけばフラフラと部屋を出て、玄関にたどり着いていた。そして、
原村さんを見つけた。

「おはよう」

「おはようございます」

「どこか出掛けるの？」

「この近くに滝があるそうなので見に行こうと思いましたが…」

「そうなんだ…」

少し考えてから、俺は言った。

「俺も行っていい？」

「ええ、もちろん」

原村さんは笑って了承してくれた。

滝は、すぐに見つかった。

頭上の遙か上から流れ続ける水流。朝日が降り注ぎ、大きな虹を作っていた。

雄大で幻想的な美しさ。思わず息が漏れた。

「すごいね…」

「ええ…」

滝を見つめながら川へと足を運ぶ、その途中で俺は口を開いた。

「俺…ドンドン麻雀を好きになってるよ。やっぱり麻雀って楽しいんだって再確認できた。合宿のお陰だね」

「よかったですね…」

川に浸かっている石の上にピヨンと飛ぶ。そのままもう一度滝を見た。

「また行きたいな…合宿…」

特訓は大変だったけど、振り替えれば楽しい思い出ばかりだ。温泉、パソコン、お寿司…昨日までの日々が次々と甦る。

「県予選に優勝すれば、もう一度合宿をするそうです…」

「じゃあ、また行けるんだ…」

「そうですね…ぜひまた一緒に…！」

振り向いて、原村さんに手をさしのげる。おずおずと、俺の手を握ってくれた。柔らかい、女の子特有の感触。それを壊さないように、ゆっくりと握り返した。

「原村さん、大会頑張ろう…！」

「…はい！」

原村さんは、先程の俺と同じように、飛んだ。

終わりと滝（後書き）

次はオリジナルの話でも書こうかな…？

マッサージと応援団（前書き）

初めてのオリジナルの話、ちゃんとできているか凄く不安です…。

マッサージと応援団

カチッ

タン

カチッ

タン

部室に二つの音が響く。

一つは俺がマウスをクリックしたときの音。

もう一つは原村さんがツモ切りしたときの音。

今日の麻雀部は、この二つの音しかない。その理由は部室に俺と原村さんしかいないからだ。

部長は生徒議会の仕事があるらしく、今日は休み。染谷先輩は家の喫茶店の手伝いらしい。そうなると残りの部員は一年生のみになるのだが、京ちゃんと優希ちゃんも何か用事があるらしく今日は顔を見せない。合宿も終わって、大会まであと数日なのにこんな状況で大丈夫なのかな？

カラン

「う…！」

俺が一人で考えていると、今までのツモ切りの音とは明らかに違う音がした。その直後に聞こえた僅かな、けれど確かな苦痛の声。何事かと

思い、椅子から立ち上がって振り返った。

原村さんは、自分の右手を押さえながら、辛そうな顔をしていた。雀卓の下に牌が落ちていいる、さっきの音はあれを落としたから出たものなのだと理解した。

俺は急いで原村さんのそばに駆け寄った。

「大丈夫!？」

「あ…ハイ」

「右手ケガしたの!? 見せて!」

「えっ? あの…」

彼女の右手を掴み、外傷がないか調べた。けれど…

「…あれ?」

ない。

これといった傷が見当たらない。それどころかキレイな手だ、軽くて柔らかくて、スベスベしてて暖かくて…。

何を考えているんだ俺は?

「あ、あの…」

遠慮がちな原村さんの声。何を言いたいのかその一言で理解し、すぐに両手を引っ込めた。

「ぐぐぐぐゴメン！！いきなり失礼なことを…」

「い、いえちょっと驚いただけです」

「で、でもいきなり手を握るなんて…」

「…あの時も、握ってくれましたよ？」

『あの時』と言われて思い出した。合宿所から帰る日、確かに俺は原村さんの手を握った。でもあれは原村さんが水に落ちたりしないようにと手を差しのばしただけで、決してやましい気持ちでやったわけでは…。

いや、それを言うなら今回も同じだ。原村さんが心配だから手を握った。それは別に変なことではないはずだ。

勝手に後悔したことを後悔した。

「そう、だねおかしくないよね」

「ええ」

「それで…どうしてあんなに痛そうな顔をしてたの？」

このまま俺一人でなやんでても仕方がないので、話題を変えることにした。

「…少し、ですけど手が痛んで」

「痛んだ？」

いったいどういうことだろう、ケガはしてないのに手が痛くなるなんて…？

最初は意味がわからなかったけど、原村さんが落とした牌を拾ったことで、疑問は吹き飛んだ。

合宿の時、部長はこう言った。「毎日一時間牌をツモって切る動作だけを繰り返してみろ」。原村さんは真面目だ、きっと部長の示した課題を毎日こなしていたんだろう。

たとえ簡単な作業でも、時間が経てば疲れがたまる。それに原村さんのことだ、必要以上に特訓に時間を割いていたのではないだろうか。

俺は拾った牌を卓に起きながら言った。

「…原村さん、あんまり無理しないで」

「私は…無理なんてしてません」

「…してるよ」

再び右手を握る。さっきと同じく、原村さんを気遣いながら。細くて小さな女の子らしい手だった。

「原村さんが全国に行かなきゃいけない理由があるのは知ってる…俺も姉ちゃんに会いたいわって理由があるから。でもだからって、その為に自分を傷つけちゃダメだよ」

「…」

「今の俺達にとって強くなることは凄く大切な事…それはわかってるつもりだよ。でも俺は…原村さんが苦しんだりするのは、イヤなんだ」

「宮永くん……」

「だからさ、ちょっと休憩しよ？お茶淹れてくるからさ」

「……ハイ」

|| || || || || || || || || || || ||

さて紅茶を淹れて休憩し始めたものの……。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

か、会話がなくなった……！！

どうしようかな……自分から休憩しようなんて言い始めたから話しかけづらいし、原村さんも何だか無口になっちゃったし！ああもう！

どうして今日は京ちゃんと優希ちゃん休みなの！？あの二人がいたら勝手に会話が弾むのに！！
何か話題の種はないかと探し…見つけた。

「そ、そういえばさ原村さん」

「な、なんででしょうか？」

「原村さんは左利きなんだね」

ティーカップを持つ左手を指しながら、俺は言った。

「そうですけど…よくわかりましたね」

「普段の原村さんを見てればわかるよ」

そう、原村さんはペンやお箸を握るのはいつも左手を使っている。麻雀は右手で打つのがマナーだから、対局中の原村さんだけを見た人は彼女が右利きだと勘違いするだろう、実際麻雀部に入ってメモを書いている原村さんを見るまで俺もそうだった。

「でも左利きで良かったね、もしも右利きだったら普段の生活が辛くなつてたかもしれないしね」

「そんなに頻繁に痛くなるわけじゃないですよ、痛むのは特訓の時だけです」

その言葉で、確信してしまう。やっぱり原村さんは無理をしていると。

何か、俺にできることはないだろうか…。原村さんは強い、それは

よく知っている、けどだからといって彼女が苦しむ姿は見たくない。それが例え、どんなに小さな痛みであろうと。何か、俺にできることは…。

そうだ！

「原村さん！」

「ハ、ハイ？」

「マッサージさせて！」

「え、ええ！？」

むにむに

「痛くない？」

「ハ、ハイ…」

両の親指で手のひらを押す。柔らかい感触の中に紛れている固い部分を指の腹でほぐした。

「上手…ですね…」

「父さんによく頼まれるんだ、『マッサージしてくれ』って。だから腕にはちよっと自信があるんだ」

もみもみ

むにむに

むむ、人差し指の付け根が特に凝ってるな、ここを重点的にほぐさないと。

むにむに

「ふぁ……」

「あ、ゴメン、痛かった？」

「い、いいえ大丈夫です！どどどどぞ続けてください！！」

何故か慌てた声で否定する原村さん。少し気になったが本人がいいとっているんだし続けよう。

さて次は…牌に一番よく触れる指先だね。親指でこねながら押していく。

ぐりぐり

「ひゃ……あ……」

「……痛い……？」

「そそそそんなことは！全く！決してありません！」

「そ、そうかな、じゃあもうちょっと強くするね」

「え、あの…」

ぐりぐりぐりぐり

むにむにむにむに

~~~~~!!!!!!」

「…原村さん？左手で口を押さえてどうしたの？」

「ら、らいりょうふれふ…」

「呂律回ってない時点で大丈夫じゃないと思うよ？」

「ほ、ほんろうにらいりょうふれふから…どうか、もう、手を…」

言われた通りに手を離すと、原村さんは大きく深呼吸した。二度、三度と息を整え、俺に向かう。気のせいかだろうか、顔が異様に赤い。

「ありがとうございます。お陰さまで右手が軽くなった気がします」

「そっか！良かったよ…役に立てて」

「…また痛くなったらお願いしますか…？」

上目遣いに俺を見てくる原村さんに少しドキッとしながら俺は答え

「もちろん！」

清澄高校近くのタコスある喫茶店

「いや、和と咲也は今頃部室で二人つきりか、どんな甘い展開になっていることやら」

「今の心境はまさに、お見合いの席を立ち去る親の気分だじえ！  
後は若い二人にお任せして…」ってやつだじえ！」

「ここまでお膳立てしてやったんだからうまくやれよ咲也！」

「のどちゃんも頑張って咲ちゃんのハートをゲットするんだじえ！」

お互い、今ここにはいない親友に向かって激励の言葉を送る二人がいた…。

## マッサージと応援団（後書き）

どうでしたか？

次回から県予選大会に突入します、それではまた。



迷子と予選（前書き）

カットカットカットオオオオ！！！！（対局シーンのな意味で）

## 迷子と予選

太陽が少しだけ顔を出している午前6時、俺達清澄高校麻雀部は近くの駅に集合していた。

一列に並んだ俺達を見回して、部長が口を開いた。

「合宿から6日…やれるだけのことはやった！さア行こうか！」

「……………はいつ！！」「……………」

まだ少しだけ夜の色が残る空に、五人の声がこだました。

。

「……………」

見知らぬ風景のなか一人呟く。

返事が帰ってくるわけでもなく、俺の声は虚しく消え去っていった。

「え〜と、たしか電車に乗って、駅に着いて、会場に行つて、入り口から入つてそれから…それから…」

必死に記憶の糸を手繰り寄せたけど、何でここにいるのかぜんぜん思い出せない。ていうかこの状況って…

「もしかして俺…迷つた？」

再び呟く。やっぱり返事はなかった。

だ、だって初めて来る場所だったんだし、なんだかどこもかしこ

もおんなじように見えるんだよ！？これで迷わない方がおかしいよ！…ごめんなさい、完全に自業自得です。

「ううっ完全に迷っちゃったよ…」

道もわからずフラフラと歩いていると分かれ道に遭遇した。とりあえず左に曲がった。

すると、向かい側から四人組の女の子達が歩いてきた。私服制の高校なのだろうか、四人とも服装がバラバラだ。

「衣おせーな…」

「また目覚ましが壊れたりしてるに違いありませんわ」

「オレ昨日あいつんち行って目覚まし5つセットしたぞ」

「うわ…」

四人の横を通りすぎる。本当にみんなどこに行っちゃったのかな…。

その時だった、急に後ろから視線を感じた。なんだろうと思いつつ振り向くと…さっきの四人が俺を凝視していた。

その顔は、先程まで談笑していたものと違い、固いものだった。妙な居心地の悪さを感じ、逃げるようにその場から駆け出した。

しばらく走ると、聞き覚えのある声があった。

「咲ちゃ〜ん」

声の方を向くと、そこには…みんながいた。優希ちゃんがこっち

つちと手招きしてくれてる。嬉しさと安堵の余り、また走ってしまった。

「みんな、捜したよう〜」

「なにはぐれてんだよ」

「心配したわ…須賀君を出すことになるかと思って…」

「そっちの心配ですか」

なにげに酷い部長に京ちゃんがつっこんだ。

「原村さんは？」

キョロキョロと辺りを見回すと、人ごみの中から原村さんは歩いてきた。なんだかひどく疲れているように見える。

「やっと取材から解放されました…」

ああそうか、原村さんって有名だから記者の人たちに質問されてたのか…たしか全中覇者だったっけかな？

本当に凄いだよなあ…。

もう一度辺りを見回す。いろんな人がいる。

背の高い人、明るい人、無口そうな人…一人として同じ人はいない。そしてそれは麻雀も一緒だ。この人たち一人一人がそれぞれの違った麻雀を打つ。

どんな麻雀をするんだろう？どんな役が好きなんだろう？

それを考えるだけでワクワクしてくる。

早くあの人たちと打ちたい!!

「全国制覇に向けてこれが最初の試合です。気合入れていきましょ  
う!」

「」「」「はい!」「」「」

原村さんの方を向いて言う。

「がんばろうね!」

原村さんは俺の言葉に力強く頷いてくれた。

そくだ…みんなと頑張ったあの合宿に成果を…見せる時が来たんだ  
!!

。

「対局室には対局する四人だけが入り携帯などの持ち込みは不可で  
電波も届かない。複数のカメラが設置されそれをこの観戦室のモニ  
ターで観るのよ」

「応援の音が届かないのはつらいですね」

観戦室はまるで映画館のようだった。巨大なモニターにたくさんの  
座席、さすがは大会といったところだろうか。

部長はメモを取り出して言った。

「では、登録したオーダーを発表します」

みんなの顔が引き締まる。

打つ順番はとても重要だからだ。

「先鋒、優希」

なるほど、妥当な配置だ。速攻型の優希ちゃんならその速さで全員の士気を高めてくれるだろう。

「次鋒、まこ」

これも納得できる、染谷先輩の安定感のある打ち方なら優希ちゃんの勢いを殺さずに次に繋げてくれるだろう。

「中堅、久<sup>わたし</sup>」

…あれ？てつきり部長が大将になると思ってたんだけどな？

じゃあ大将は原村さんで俺は副将だな、点数が勝っていればさらに突き放し、負けていれば大将のために少しでも差を縮める。ここも重要な場所だ。

「副将が和で大将は咲也」

え？

「おっ、俺が大将ですか!？」

部長の言った言葉が信じられず、聞き返してしまっ。

「合宿でシミュレーションした結果、この順番しかないと思ったのよ」

「でもだからって俺が大将なんて…」

大将…最後の最後で勝負を決める本当に大切なポジション、そんな所に俺が入るなんて…

「ま、いーじゃねーか信頼されてるってことでさ」

京ちゃんが肩を組んで言ってくる。

「俺なんて補欠だぜ？ほ・け・つ。活躍できるだけマシだろ？」

「京ちゃん…」

決して嫌味な言い方なんかじゃない、俺を励ましてくれる親友の言葉に少し気持ちが軽くなった。

…ていうか京ちゃん泣いてない？

「後半になるほど点差のために自由に打てなくなる、トビ終了もあるしね」

自由に打てない…か。そう考えると一番最初の優希ちゃんはいいなあ。

当の本人を見ると、拳を握りしめて喜び勇んでいた。

「てことは先鋒強いのをすえるのがセオリー！すなわち我最強！！」

「わら点数計算でけんからじゃ」

「あんだけやった数学ドリルも意味なかったか…」

その京ちゃんという言葉で思い出す。テストだったら余裕で赤点を探れる答案の数々を。

所変わってトーナメント表の前。並べられる幾つもの高校名、この全てがインターハイを目指して戦い合うのか…。あまりの数の多さに思わず息をのんだ。

「今日の一回戦で58校が16校に…午後の二回戦で四校になる。そして明日が決勝というわけ」

「うちみっけ」

指差す場所を見ると、Eと記された場所にたしかに清澄とある。

「たくさんいるねー」

「中学の時よりずっと多い…」

「激戦区の大坂にくらべりゃあ3分の1もないがのう」

じゃあ大阪のトーナメント表はこれの三倍の大きさなのか…壁が埋まったりしちゃうわないのかな？

俺がそんなことを考えている時だった、後ろの方から声が聞こえてきた。



「1回戦の相手ぬるいなー清澄、東福寺、千曲東だつてらくしょーじゃん」

「清澄つてあれでしょ、原村なんかの！」

「あーさつき記者相手に全国優勝とか言ってたの見たー。ありえないつて！ちよつと胸が大きいからつてチャホヤされてるだけっしょ」

心ない、悪意のある言葉。こんなことを平気で言える人たちもいるのか…。

心配になつて原村さんの顔を見た。

「原村さん…」

「大丈夫ですよ…1回戦頑張りましょう…」

原村さんは薄く笑っていた。

本当にこの人は強い、もしも俺が同じ立場だったら…心がもたないだろうな…。

『あと10分で1回戦が始まります。各校の先鋒は所定の対局室に入室してください』

「ついに主役の出番だじえ」

「じゃー私達は応援してるから、頑張つて優希」

「きばつてけー」

「期待してます」

「気合い入れてけ」

「がんばってね優希ちゃん」

全員からの激励に優希ちゃんは笑顔でサムズアップしながら「まかせとけ!!!」と応えてくれた。

。

俺達以外にも観客はいたけど、それも片手で数えきれんくらいだった。

目の前のモニターが対局室を映す。そこにはいましがた入室した優希ちゃんが席に着く映像が流れていた。

いよいよ始まるんだ…大会が…。

心臓の鼓動が速くなっていくのがわかる。

そして、試合開始のブザーが鳴り響いた。

東一局 親は優希ちゃんになった。やっぱり優希ちゃんは東発の親になることが多い、まるでなにか不思議な力に導かれるようにサイコロが優希ちゃんを親にする。

それは配牌も同じだ、この東一局の優希ちゃんの配牌は赤ドラ1つに東が2枚見えてる。そして麻雀では最初は字牌を捨てることが多い…

『ポンッ』

だから優希ちゃんがあっさりダブ東を鳴けることも珍しくはない。

俺も優希ちゃんが東発の親の時には、たとえ邪魔でも東だけは捨てないようにしている。

「カン！」

引いてきた東を使ったカン、ドラ表示牌は七筒、つまり八筒がドラになる。そして優希ちゃんの手牌にはそれがふたつある。

「チー」

四五六と鳴いた、これはただ鳴いたのではなくて優希ちゃんなりの戦略なんだろう。

赤ドラとドラの四筒をさらしたことで相手の動揺が見てとれた。

そして優希ちゃんの当たり牌である八索を相手が出したのは、鳴いた直後だった。

「ロン18000!!」  
おはよび

。

結局その後も優希ちゃんらしい速攻で相手を翻弄、俺達の点数は149600となり先鋒を一位で通過した。

次は次鋒戦…染谷先輩の番だ。

「他校がセオリー通り強い人を先鋒にしていたならもうキツイはず」

「次はわしの出番かの」

「もちろんそのつもりじゃあ、行ってくる!!」

.....。

.....。

.....。

さて次鋒戦も南三局になったけど...清澄のトータル点数は減っていた。

京ちゃんが部長に言った。

「染谷先輩危なくないっすか？」

不安 正直な所俺も京ちゃんと同じ気持ちだ。けど部長は笑いながら言った。

「まこが何年麻雀打つてるとおもってるの？誰だっっていい手が入らない時もある、でも見てごらんなさい」

モニターの中の染谷先輩は...眼鏡外していた、それと同時に俺の中にあつた不安は欠き消されていた。

「ローン！16000!!」

「ロン！3900!!」

「ツモ！30000・60000!!」

次鋒戦終了。

相手の選手から煙が出てる...ように見えた。

「さて、行ってくるかな」

一回戦もとうとう中盤に差し掛かる。俺も気合いを入れて部長を応援…と思っていたけど。

「和と咲也は2階の喫茶店で何か食べてきたら？」

「え…なんで…」

「バナナと乳製品を同時にとると脳が活性化するんですって！」

「またテレビの雑学番組ですか…」

部長あの番組みてるんだ…。

。

言われた通りに2階のに来たけど…これでよかったのかな？いくら部員が少ないとはいえ部長は部長。部で一番偉い人を応援しないなんて…。

「部長の応援しなくていいのかな？」

「大丈夫ですよ、あの人にまかせて悪くなったことなんて今までありませんから」

即答。部長がどれだけ原村さんに信頼されているのかが伝わった。少し羨ましいな…。

喫茶店の前に来ていざ入ろうとしたその時。

「おいその！」

誰かに呼び止められ立ち止まった。

振り向くとそこには…二人の女性が立っていた。

一人はすごく背の高い人、京ちゃんよりも高いんじゃないかな？銀髪で俺達を睨むように見下ろしている。

もう一人は頬に星のタトゥーがしてある。

背の高い人が口を開いた。

「おまえ なんなんだ？」

「え…俺は…」

意味がわからずたじろいでしまう。  
いきなり自分が何かと聞かれても…返答に困る。

「俺は…清澄の生徒ですけど…」

とりあえず出身校を名乗っておく。

「そうじゃなくて、おまえはなんなんだって聞いてんだ！」

ええ〜！？どう答えたらいいの？

意味不明な質問に思わず混乱してしまうが、そこでアナウンスが入った。

『E卓中堅戦終了です!』

早い。優希ちゃんが30分くらいで終わったけどそれよりもずっと早く終わってしまった。

「部長…終わったみたいだよっ？」

「早いですね…」

「っていつか次原村さんだよ!？」

ここにいる場合じゃない二人で駆け出す、結果的にあの二人から逃げれたけど…なんだったのかな、あの二人？

。

観戦室に戻ると、モニターには14500点プラスされ、相変わらず一位の場にいる清澄の文字があった。

「早かったですね…」

「安い手ばかり速攻で6回和了りよった」

染谷先輩の言葉には呆れ色が見えた。

戻ってきた部長が原村さんを見つめる。

「さああなたの番よ」

「はい」

「私より早く終わらせてきなさい」

「…はいっ!」

それを見て、俺は原村さんが座っていた席から原村さんの相棒を拾い上げる。丸い、特徴的なペンギン…エトペンだ。

「がんばってね原村さん!」

エトペンを原村さんに差し出す。

「はい」

エトペンをしっかりと抱き締め、原村さんは扉に向かっていく。そして最後にもう一度振り返り

「行ってきます!」

瞳に強い光を宿して、彼女は観戦室を出た。



迷子と予選（後書き）

男女混合なのに出場校の数が変わってない？

アーアーキコエナーイ

## 願いとラーメン(前書き)

多分今年最後の投稿かと思えます。  
ではございぞ。

## 願いとラーメン

静かに揺れる列車の車窓から、原村和は景色を見つめていた。太陽はすっかり沈み、青と黒の混じった夜空がそこには広がっていた。

目の前に視線を移す。はしやぎ疲れたのだろうか、向い合わせのシートに座る京太郎と優希はもうずいぶん前から眠ってしまっていた。清澄は、1回戦そして2回戦を無事に勝ち上がった。それは清澄が予選大会のベスト4に残ったことを意味する。そして明日、勝ち残った4校が戦い、全国大会への出場権を得るために競い合うのだ。和の心は安堵で満ちていた。とにもかくにも全国へ一歩前進したのだ。このまま行けば父との約束を果たすことができる…。

和は外の景色を眺めながら自分が戦う理由を思い返した。

。

『麻雀？』

咲也と指切りをした数日後、和は父と車で出掛けていた。

和の父は弁護士を職業としている。世間一般で言えばエリートと呼ばれるモノだ。それ故に父は厳格だった。

自分が誰に対しても敬語で話すのは父が原因だろう、和はそう思っていた。

『東京の進学校を蹴ってまで続けることがそれか』

両親の仕事は常に忙しい、幼い頃から転校ばかりで友達と呼べる人

和にはほとんどいなかった。  
それでも両親が自分の事を考えて東京の進学校への入学を薦め、そこに入学をすれば暫くは東京で暮らそうと言ってくれた事には驚いた。

だが、和はそれを断り長野に残ることを決めた。

『中学で一人友達ができたんです』

親友の 片岡優希の顔が浮かんだ。

自分に他人と打つことの楽しさを教えてくれた少女。

いつも元気で、無邪気で、タコスが好きで、ちよっぴりスケベで、でも芯が強くて…。

今までネットでのみ麻雀をしていた和を外に連れ出してくれた友達。

離れたくない。

だから優希と同じ高校に入った。

『それに…高校でも…』

また一人、和の脳裏に顔が浮かぶ。

自然と自分の左手の小指を見つめていた。

宮永咲也

はじめは彼が許せなかった。

自分にとって大切なものである麻雀。大切だからこそ、和は手加減をするのも、されるのも嫌っていた。

だが彼は、麻雀が好きでもない彼は、自分にはできない事をやって

のけた。

だから再戦を望んだ、そしてその結果、和は敗北した。

悔しい

認めたくなかった。

麻雀を嫌いな人が、自分よりも強いということが。

手加減をするその理由が、相手を気遣っているということが。

だから和は咲也を否定し、拒絶した。

(今思うと…酷い事をしてしまいました…)

しかし、二人は意外にもすぐに和解できた。きっかけは咲也が全国を目指す理由を話したことだった。

バラバラになった家族をもう一度一つにしたい。

真摯しんじな家族への想い。

純粋な姉への想い。

その想いに、和は自分と同じものを感じた。

夕焼けのなか、指切りで約束を交わす。

和にとつて、大切なものが増えた瞬間だった。

『こんな田舎の友達がなんの役に立つ。麻雀だってほぼ運で決まる不毛なゲームだろう、練習して大会だなんてバカバカしい』

冷たい、刃物のような言葉。自分のためを思っていてくれるからこそ、その言葉は苦しかった。

自然と小指を握り、なんとか震える声を絞り出した。

『では…高校でも全国優勝できたら…ここに残ってもいいんじゃないでしょうか…』

沈黙。

だがカーブを曲がりきった所で父は口を開いた。

『できたら考えよう』

。

「…ん…」

トン

「え…?」

不意に…和の左肩に重みがかかった。

何事かと見れば、咲也が和の方に体を寄せていた。

トクン、と心臓が波打つ音が聞こえた。

「すう…すう…」

男子にしては低い身長、幼い顔つき、そして無垢な寝顔。緊張とはまた違った感覚が和を包んだ。

なんとか平静を保ちながら、和は願った。

どうか　この胸の鼓動で、宮永くんが目覚めませんように

どうか もう少しだけこのままでいられますように

どうか ずっと宮永くんといられますように

……。

……。

……。

「ほい、チャーシュー！」

ドンと置かれた器から湯気が立ち上る。味卵、海苔、そして大きなチャーシューが三枚も入ったチャーシュー麺。これが今日の俺達の夕飯である。

俺達清澄高校は見事1、2回戦を勝ち登り明日全国行きを決める決勝戦へと向かうことになった。

今日はもう遅いので、部長が夕飯を奢るといっことでこのラーメン屋の屋台でやや遅めの食事をしているのだ。

「いただきます」

「うまそ〜」

「おいしそうだしえ〜」

「……………」

さっそく一口…うん美味しい。

「……………」

…あれ？原村さん食べないのかな、動きが止まっている。

「のどちゃんはラーメンは初めてか？」

「ラ…ラーメンくらい知ってますっ」

そう言ってお箸を取って、麺を一本だけ摘まむ。優希ちゃんが麺をすするのをチラチラ確認しながら、おそろおそろ口に箸を持っていき…すすった。

口に手を当てて驚いた顔をする原村さん、どうやら思ったよりも美味しかったようだ。この反応からして、ラーメンは知ってても食べ方までは知らなかったんだろう。

「美味しい？」

「ハ、ハイ！」

「おやじ、おかわり！」

「あ、俺もおかわり！」

驚異の早さで食べ終わり、二杯目に突入する優希ちゃんと京ちゃんに苦笑しながら、俺達の遅めの夕飯の時間は過ぎていった。



願いとラーメン（後書き）

決勝どうやって書くのかな…一応オリジナル要素も入れる予定だけ  
どあんまりインパクトは無いかも…。

今年もいろんなことがありましたが、皆さんはどうでしたか？私は  
今年中に大学が決まったただけでもう満足です。

それではよいお年をノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5943x/>

---

咲也-sakuya- もしも咲が男だったら...

2011年12月29日02時54分発行